〔中篇〕

私を海に投げてから
佐々木中

遁れなくてはならなかった。つちを盛り、均し、耕し、整えるべきわが土地はもうない。それとも、取り戻すために、ふたたび世界を巡らねばならないのか。不毛と知りつつ、また不毛と知るために、それだけのために。あれだけ女たちの地獄を見、その血と恥辱をひきかえにしたというのに。遁れよう。彼方に遁れよう。もはや何を感じ取れるのかも知れないまま。このまま。

雨水が烈しく叩く。ひたすらにひらたく薄鈍の滌青に舗装された地をみるみるうちにひとぬり、くろくそめた途端それは、限りを知らぬ踊る白い草叢になる。無数に跳ねるしる粒を一面にいちめん立て、こまかに、さやかに、数多のものを揺らしている。揺れている。私の、この一つ身も。この瘦骨のふしぶしにもひびいてくる。夏のさなかに顫えて。水は叩き、水はつたい、水はながれ、すべてを重くし、すべてをぬれぬれとひからせる。ぬかるんでいる。暮れ果てていた。万象かぐろく、闇に沈み切り、もうかたちがない。ただ茫とひかるのは果てしも知らず地に繁吹く水煙のみ。どこからのひかりを、受けていることか。

ゆくはては南、島の岸辺の、打ち捨てられかけた陋屋、ここはひとのもの、たまさかの栖か。疎らに開こうにも、すでに芯がない。また災厄、また破滅、また死、また罪、また喧噪、逃げまいとして追い詰められ、踏みとどまろうとしてもさだめに強いられ、

それぞれの高みから銀よりも澄んできらきらしくひかり、ふり、落ち、そつと地にふれ、そのおもてをかそけく打つ。そのたびに一粒ずつそのまま地に沈み、にじんで、溶けて、吞まれていく。ふつと葉を離れる音、地を打つ音、地に吞まれる音、その細いほそい音がうちかさなつて、また数知れずうちかさなつて、一つの森を巨細に鳴らす。ちいさな一しずくの慄えも、宏大なその唱和も、同時に聞こえている。うれしい。このよろこびは、誰の喜びか。今度は、無慙に冴えて無機質な真夏の日輪の光が叩く。みるみる増えた土の厚みが、惜しみもなく水を蒸しあげて、そらに向つて吐いている。呑み、吸う、吐く。したり、さゆらぎ、さんざめく、さかなな杜の生理よ。

光は叩く。熱が絞る。たあいもなくなつかしく、水ぶとりした地のものどもはからだのかたいところからもやわらかいところからも、老いたところからも芽吹いたところからも、さらけだしているところからもかくしどころからも、深空にむかつて水を吐くしかないのだった。蒸しあげて、蒸しあげられて、そして私の身もしおからい汗を噴く。瞬時に乾いて、渴いて、膚のみいちめん濡れそぼつて。雨みずの立たせる石のにおいではない、しょっぱく、ぬらめき、ねばり、ねまる、有機質のくたれたにおいがからだの奥から絞り出されてくる。森の奥へとあるく趾が、くるぶしまでぬかるんだつちにまみれ、あか泥が爪の中に入り込んで、散策への心躍りをくじいた。棕櫚の大樹がつくる葉むらのひろびろと豪華にゆたかな翳りのなかでようやく息を長くながく吐き、しばらく、陽と地と森のいきることわりにしたがつうしかなかった。もう一度、あの家に籠められて、ひどくふるびた冷蔵庫から水菓子でもだして、時を待つしかない。今度は、光と熱と、なに

説き伏せるわずかな救けの手をよすがに今日、遁れてきた。また遁れくる。

いつでもどこまででも意のままに遁れおせるものではないと知りながら。

颯風が見はるかす限りくらやみにする。雨風の鳴りどよもしで世界を聳する。繰り返し、わずかなうすくらさが、また目癢いらせる漆黒になる。繰り返し、雨脚の音がふと近くなり、また遠くなる。繰り返し、風声がひとしなみに鳴り続け、不意に金気をおびて失る。そのまま降り籠められて、日が永くなった。その永さのもろともが、みじかくもなつて、ここに来て幾日かと指を折る。首を傾げさせられて、また開く。一本ずつ。

一階の、部屋から部屋へわたつて、どこを踏めば軋りの音で鳴くのかあらあら見当がついたころ、耳が外にひらいた。絶え間ない森のぞめきがひびいている。頑是ない、はしたないまでのよるこびが身の底に貯まっていた、貯まっていたことに今気付かされた、つめたい淀みをふりはらつて沸いてくる。——日が射していた。

外はしずかな、しかし膨大なしたたりのひびきで満ちていた。あれは蘇鉄か、棕櫚か、檳榔か、それとも椰子か。数知れぬ木々が、枝々が、葉々が水をふくんで、そして一粒ひとつぶの水滴を散らす。ふつり、ふつり、したした、ぶつぶつ、大粒も細粒も、

よりも蒸発にせめられて。回線は遅くて役に立たず、同時通信の手段はなかった。奇妙に気のさくい、孤島にあつて孤絶しているのに孤介の、世を拒むせまさのない部屋のつくりのなかにひっそりと立った、男の肩幅くらしいの細身の、しかし私より頭二つぶん高いひとつさりの本棚は、ほぼ図鑑で埋まっていた。

幾夜の忘失を経てか。ひしひしと迫る森の呼吸の厚みうすかわ一枚向こうに、かすかな潮鳴りをきいていた。遠い。この遙かさは、幼時の北辺の湊の記憶を聴いているか、それとも耳に落ちてくるこの身の鳴りか、とあやしみかかる。理を動かす、勝たせて今いるここは島で、そして海に近い筈だと思いつ返すまで、では私は理もなく何を忘却していたのか。おのれのあやしみをまたいぶかしむ、そのあられもない自らへの没頭へ、禁めがはたらいた。惘然として、うすあかる森の小路を行く。

朝焼けぬそらは錫箔を貼られ、黒白銀に澄んだかぎりない階調のうすびかる。凍りついたように動かない、のはいつわり、振り返るたびに光度と彩度をわずかずつかえて、ゆらめいている。遷っている。このびんと張り詰めた静けさもこの吸気のアじきない無味も、この身の遅鈍、けうといのろさゆえ。すこしずつ、すこしずつ、耳がひらく。鼻孔がひらく舌がひらく肌がひらく。身のおもてを、触れ、くすぐり、舐める気配がわたつてくる。あの森のさゆらぎの下地に隈なくぬりこめられた潮騒の、うち寄せて引いていくその律動が、淡水を多量にふくんですこしずつ分解していくしかばねになったものたちの、甘くされるおくびをかき消して、潮水のおいをつれてくる。幾億の葉むらの一枚ずつが水を呑んで酸素を長くながく吐いて、大気を青からく、ほのにがくす

る香りに、うすらにねばる塩気がにじむ。地の底からたちのぼる、あの、冷えているからこそなまじい、くらぐらとした黒つちのにおいの中を行く。うつうつとした、ぶあつい南島のみどり、明暗に明暗を重ねて、歩みひとつずつ、そのぞろりと柔毛が生え揃った内臓のなかをくりひろげる。尖った、ぴりぴりとした舌で、草葉が手をなめる。膝をなめる脹脛をなめる。ひっきりなしに、うす痛がゆくする。

潜む草花の、けだものたちの気配をおそれて、そつと、そつとふりかえると男の胴体ほどもある巨大な葉が雨風に下折れた枝からさらに垂れて、きっかり半分あちやけて枯れ、くさり、ちりちりと萎んで、焦がしたかのように端からめくりあがり、節だった葉脈をこの世のものならぬ肋骨のように刺きだしているのだ。この人影いつせつない森の、伸び育り、枯れちぢみ、よごれものをひりだして腐れ死に、うごめき、食い食われてまた生まれていくすべてのものどもの気配が、いつせいに刺してきて、もう、いつ殺されても仕方がないのだった。殺されなどしない、ころされなどしないためにここに来たのだ。と、言い聞かせる。しかし、あのおさない日、誰もいはいない山道でそして浜辺で、ふと戦き、慄え、不意にふりむいて、何も誰もいなかったときの果てしないしげさの、あの安堵ならぬ恐怖は、そのまま、そのままにほのあまくなつかしい胸苦しさになって、ゆつくりとこの身のなかを掻き交せる。このなかの漿液を対流させる。すこしだけ汗になつて。

まだぬかるんでいる小路をよるほいゆく。おりていく、海へ、潮の香のほうへ。不意に森がひらけて、右手にいちめん、葦めいた細い鎗葉が真夏なのに枯れ色の、明けきらぬひかりに浮いてしるをして茫とひかるこの身をそれでも汗じみさせて、生きてうごいてほどなく死骸になるものと告げる大気のぬるさが、どうしても結び合わない。何かを蹴った。

折りくぐむ身のほのひびく、ふしぶしのわずかな軋みをいぶかしみながら、足元に腕をのばし指をなけば白砂に突き入れる。おそれがひとつ身動きする。人差ゆび中ゆびのそのさき、ひえて硬いつややかさを、そのままに拗じ上げた。手のなかで密なまるみをつくっている。ぬめる軟体動物の文様をしたむごく硬質な肌、しつとりと掌に重みをつたわせている。寶貝だ。赤子のこぶしほどもあるそのおもても、この光のなか、あお味のみほの照る。勝手な心細りが、物言わぬ海原に今日はこれを持って帰れと言わせた。大海がこの小さなおのれに語りかけてくれるなどという尊大に、呆れかえる笑みが胸底からする泡立って、気泡がからだの内壁をこまかにくすぐりながらのぼると、ぬれぬれと吐く息になつて大気に散った。

らじらとひかるのが、見渡すかぎりに天を刺して、ややもすると白刃の気化した靄がかつきりこちらの背丈より下だけにこめているようなのが、こわい。ひそとも音を立てず、こちらを眺めているようなのが、おそろしい。なのに、この鎗葉たちは、ひさかたぶりに闖入してきたであろうこの人間がどう思うかなど、まったくあずかり知らぬだろう、ではないか。この刃たちを刃と呼ぶのも、おそれるのも賛嘆するのも、勝手なのだった。

不意に白砂をふんでいる。波に濯われたまるみを少しくだしている若いわがそれでも鋭角を剥き出して足裏をおびやかす、ひくい野生の蘇鉄の葉がまがまがしく硬く鋭くさし交わす向こうから、わずかに、くらい海が見えた。が、男ならひとりやつとの細い、急な下り坂の、しかも肌理のこまかい砂がかすかに軋んでする岩をあやうくたどらせられて足元を見るまなざしを、どんなに硬い蘇鉄の葉が頬なり喉元なり肩なりを邪険に突いても、視界の上隅に潮がひかっている、そらすわけにはいかない。うつ伏せにだろうと仰向けにだろうと、あつげなく倒れこんでしまえば、さて、動けるかどうか。助けの声などあげることができても、分厚い森を背にして、いったい誰が聞きとれようか。ころされても仕方がない、か。とまた、この下り坂にひどくさい殺意などありようがないのだった。

空があかるんで、透明な灰青をひからせている。墨をながしたようなくる雲がひとすじ、視界のかぎり天球の弧にそって撓み、その途切れかすれがちな雲間の彼方から、うすらにかくれて形さだまらぬ真白い陽がきりない光を漏らしている。光芒がいくつもいくつも、扇を逆さに立てたすがたになつて海に刺さり、遠景の黒と灰青を断ち切っている。海のほうが昏い、錆びた錫箔を貼つ

でなみはみじかく、しかし醒めきらずむずかかって、ここはどこでなぜどうしてとその都度に湧くあやしみを一つひとつあやして説き伏せるそのたびに暇どり、ねむさをもてあまして折れかかり、机上、白紙一枚のうえにうづくまる、ふるふるとうるえだしやがて這い出す褐色の巨大なしづくの、異形におどろき一歩退つて眺めた。動くとかえつて危ないとまで瞬時に心だくみをした手前のおびえがおかしく、そのまま寄つてその硬質の大しづくを取った。掌のうえでまるまると太つて、ほのぬくく、かつきりとまとまる。窓外からの惜しみなくあふれる夏の光にかがやいている。硝子のように澄んで硝子よりもかたい象牙いろの地に、仮漆をあつぬりしたようにあなたかく底びかりする赤味が勝った栗金茶いろの上にまた、うすあおい白磁いろの斑点がまるく、いくつもいくつも散っている。ゆかしい。この炭酸カルシウムとコンキオリンの複合体を、鼻先からしたくちびるにかけての、あいまいな場所押し当てて、そのあまやかなすべらかさつややかさを、ひっそりとたしかめていく。と、ふと倦厭が差してそのまま置いた。私はこのような玩弄をさらう。惑溺を好まない。などと、そう遠くは無いいつの日にか生をうしなつて貝殻ひとつを残し潮のながれにゆだねた、この寶貝の一匹には何もかもが関係のないことなのだ。生き果てたあとの死骸をもてあそぶもその行いを忌みきらうも、このものにはどうでもよい、ことのはずだった。と思うことすら、人に準えているだけなのかもしれない。ただもう一度手に取り、うらがえて、ぞろりと犬歯だけでできた口でわらうような切れ目を眺めた。この部屋で、誰一人、なにひとつ、笑つては居なかった。

雑踏にならまされることが出来る。ひとの出盛る頃合い、が、

昼ひなかから真夜中までつづく街は、こよなくやさしい。ときれることをしらぬ繁華のなかをひっそりとしのんでいつて、人混みががてで、その混雑のひとりであることだけわすれて少しく苛立つ横顔たちを、またくもる横顔たちをみながら、それでも、にぎわいのなかに入り込んで仕舞えば、何者でもないという無責任の佳味を噛んで、たのしく、うつけていられる。だがこの孤島の陋屋、とりまくにぎわいはどれも人ものではなく、言葉がつうじない。葉をゆする、かすかな夕の潮風がしだく音がきこえる。さらめく、ざわめく。日本語で言語を言の葉といい、ことばを書きつける紙を一葉二葉とかぞえるのは、何という過ちか。と、ふと字引がほしい心もちになっても、ここには何も無いのだった。

都会はしずかだ。酔余の嬌声はじつはまれ、夜中になれば車の走る音もない。しずかだ。こどもが、黙っているのは人間だけだ。虫やけだものが這い、むくめき、哭び、森が鳴り潮がどよめき、いつしかひらいて耳ざとくなつたこの身には絶え間ないそのひびきが伝わってくる。このからだ一つも、なかだちする器具なのかもしれなかつた。この身じしんも、ゆらされて、鳴って。

けえけえ、びきびき、りるりる、ぢいぢい、夜の底から地虫たちがおめきあっている。雨中だろうと蟬はずだく。熊蟬、琉球油蟬、蟪蛄、岩崎草蟬、姫春蟬、茅鯛、それぞれ、生きてなお生き物らしからぬ機質の軋みで、今生ばかりとあらぬ声でさけぶのが、くるおしい猖獗のようになる。吼えている、人ならぬ声になものか遠く。羽撃きをつれてなら鳥とわかる、しかしあの犬とも馬ともつかないかすれた、しかしくつきりと密林を割って来るぜいぜいとした声は、なにものか。びしり、びしり、ひたひた、ひたひた、小枝を踏みくろ土を歩きまわりこちらを窺

てくる目を、やっと、やすらわせる。

渺かな大海の汐の、澄んで清いがやがてべたつく粘をふくんでなまぐさい旺盛は、私の口を犯し喉を犯し肺を犯し、そのほかの内臓のすみずみまで、ひやつこくぬめる汗ばんだ辛味となって、あおりこまれ、しみこんでいく。腋の下、股ぐら、かくしどころのすっぱいくさみが汐のよう、なのではなく、ひとの身こそが海くさいのだった。その海くさをすりつけあって、生き延びていくしかないのが、厳然たるさだめであるか。掟か。いきていかねばならぬものどもの肉慾のちいささの。

南島の真夏はあおい。日輪は残虐がならい。おびたしい水面のひとゆすれ、こまかい皺のひとつづつを、灼き、焚き、たたいて、潮を焦がす。波のこげてにおう。汗のこげてにおう。何もかもがあかるむ。何もかもがくらむ。何かもかもが干反る。何もかも濡れそぼつ。対。照のいちじるしさが、よろこびとなつてまたいたみとなつて、くりかえし五官をひらき、明滅させつづけている。白砂の浜のおもてに、打ち上げられたものどもの朽葉いろの筋がうすらにいくすじもとおつていて、おのずと辿る足取りになつて岸辺をゆく。廻りこむかたちになると、いつかのほほ無色の朝、異形をつくつていた花弁のすがたの岩の、咲くかたちのむこうにまたふた峰、岩礁がもりあがって、寄つてみれば花の姿は真ん中で割れている。盤踞する岩の全景は鯨にも腕にも見えた。花弁を尾先とみれば尾を振り立てて水面下に沈もうとする鯨に、花弁を手首をうち揃えてゆびをひらいた両の掌と見れば天にむかつてなにごとかを祈り希う腕に。こども、他のものの形に擬することは、人の身には避けられないことなのか。憂鬱な愉しみなら、まだしも。

ねらう音がこの家まわりをひとめぐりし、かすかきぎみな吸気をもらしながら、ふと消えていくのを、凝然ときいている。くぐもつて押し殺した剽悍の気配を。そしてまた、ふと地のものどもの黙しがもどるたびに、ふつつ膨大に押し寄せてくる。遠く海の鳴る、近く森のみじろぐ。

このひとの聞き澄まし聞き分ける耳なくばこの騒ぎもないなどとは、考えないことだ。常用の耳栓をそそくさと詰める、至極当たり前の処方、理のない、絶えぬ恥の責めがつきまとい、うちすてて、夜への、きりなく重なりにかさなる翳りへのかぎりのない警戒、感官のひらきをそのままに、眠りをうすくのばしていた。その疲れがつもり、凝つて重くなり、かえつて深い眠りにひきずられていったか、その疲れが疲れとわからなくなるまでに、もろともに燥ぎとなつたか、うかれあるく無益な闘達、目を覚ますたびに、免れられなくなる。

水のおもむろな揺曳、ゆらめきひとつづつ映える、花やかにきらつき目潰す炎天のひかりに追われている。目を側ましても側ましても、見渡すばかり闊けたはてのはてまで悉く皆まばゆく、まなざしの、のがれるところはない。寄せる潮をつまさきで割って引く潮をかかとで割って、くるぶしまでのほのつめたさをあどけなくよるこんだ。ひたすらにひらいたい、ずぶぬれてあかるく凝つた浜砂の上を、けぎよくしずかによせてきて覆う、うすい波水のおもてに、ゆらめき透かす格子柄を描く潮泡のしるさが、きらきらしい。ぶつぶつ、ぶつぶつ、この脚に泡のわれはじけるちいさな感触をのこして、かそけく擦っていく。ふりかえつて真白い浜砂の向こうの鬱蒼、ふかぶかとしたみどりの翳に、眼底まで乾い

小浜のあいだを切り浦にする岩礁の突端で、浜は途切れていてみちなく、水のなかに這入っていくと足元がかたくぬめる。白砂が沖まで続いているところははない。はだしではあるけない。どこまでもひらく藻をやす岩肌か、強く尖る磯しかないのだった。この島はぜんたい、珊瑚礁でできている。隆起した地層のうえに幾万年か、珊瑚に珊瑚が集つては死んでつみかさなり、石灰の巨岩となつて出来たと聞いている。だから海中にしずむ砂浜はなく、そもそもこの島に川はない。ゆえに海がにこりにくい。ひかりながら、おやみなく膝のあたりにくらりくらりと寄せてたたく小波が、すこしずつ脚をすくう。ゆらす水の、透かしてみえる底の岩肌の、かすかなぬめりのなかに、突き転はそうとする。おやゆびしろく、踏みこらえようととも、甲斐はない。転がされる前に腰を落とし大胡座をつくる、と、心窩がすっかり沈む胸元あたりに波がよせて、肌ひやつこくあたたつた。尾骨のあたりからこころよい冷えがつたつてくる。この胸から沖までひろびろと光風いで、見はるかすかぎり波濤のくずれるしぶきひとつないのだった。こぼした潮の香が顔にひどくちかく、吐く息もろともが同じいしよっぱさになさるまでじつとしていられるしかすべがない。なにも、なにひとつもの思えなくなつて、ただひたひたと底をながれるものは、すこしくぬめる水のようなよろこびのしたたりしかなかつた。浜風にふかれて放心するこの身は、あやない大海の膨大な喪神に晒され、強いられ、何もものでもないものにあくがれているほかないのだった。

すこしずつ潮が満ちているか。それとも沖に風が立つてきたか。ややもすると波頭が顎をかすめて、口くちびるにからい泡つぶがふれた。どれだけ、こうしていたことか。立って、這つて、まる

びながらのろのろと陸により、白砂に腰かけて波打つ際に膝をなげだし、うすくのびてくる波とかすかな潮泡に脚をあらわせた。両の腕のいきばがなく、そのまま肩のうしろで熱い砂のこまやかに突き立てると、左のゆびがさきに硬さがあった。石くれのあたたかい密度でもなければ、貝殻のはのつめたい凝集でもない、あまいなべつたりとしたぬるさごと、怯えもなく引き抜いた。人工のものうすぬるさだった。べたりと鏝をはり付けたような紫いろの透明がてのひらのなかで映えて、水でひとゆすぎすると正体がみえる。使い捨てのライター、異国の文字がおもてにしらじらひかっていた。三久牌という文字の一例が読める。その下の文字が消えかすれてまばら、かすかに陽と機(はた)の文字がうかんではいる。簡体字だから中国からか、繁体字だから台湾からか、それすらも読み分けられず、またこんな南の孤島のひとかげない岸辺に座り込んでいてまで、たよりなく、字引がほしくなっている。ひかりに透かされて、なかに貯まっているこれはボタン瓦斯なのか、それともすでに海水なのか。いくたび試しても、火はつかなかった。無理じいにおしつけたおや指に、鏝のにおいがうつった。

その夜ははるかに深けて、大窓の硝子がふしぎとちらちら点滅するのが、おそろくまたたくこの験がみせる錯覚だろうという思ひなしが、すこし無理になっていた。それくらいかすかな点滅を、いちめんの硝子窓にわたってひからせるのは、なにものか。窓に寄る。密林をまた密林の影が塗り重ねて、目を閉じてもひらいても何一つ変わらない真闇にしている。その真闇がせりあがって、黒一色のはずのそらをおしせばめ、ひきくらべにうすあからせ、銀鼠のうすぎぬがゆるやかに襞おるように見える。その向こう、わずかにその樹木の密集が切れた先に、今、見えた。みえる。と

を風に溶いた淡味がまざっている。ふとぶとと噁(おく)を吐いて繁茂はさかん、だが、やくざな野草を投げ合う春の發情はすでになく、いまはうつそりと濁るからだ、果実を孕む支度のため、水を吸って腐れを喰い、身仕舞いわるく、いたいたい凶相を剝いて陽にうたれているのだった。酸化亜鉛と蜜蠟を練り込んだ向日葵油をぬらぬらとしらびかるまであつぬりしても、海への行き来はこの肌を日ぐるませずにはおれない。今朝も若くするどい光線が、あくたらしく椰子の梢に殺到して、ふさやかに尖る長い葉の抜き身と、斬り返しあっている。

熱と光がちらばう、まばゆい細波のひとうちずつ、磯の巨岩を拵(こしら)っている。小突かれ削られて幾年、岩はこわごわしい苛(い)さを鏝い、うかつに手をつけば落としたり前(まへ)にひとしたり分の悪血(あくけつ)をかえさなくてはならないのだった。くつきり左手の半分、きり疵(きず)はどこにも見えない、まま、じんわりとうす皮(かわ)いちまい向こうから静脈血のなまぐるさがしみてくる。と、その岩礁の肌おもてが、ひよんひよん、ひよんひよん、うごき出す。見えないものの、大量の、ちりぢりになっていくけはいだけがする。目を凝らしても、一面にいちめんに細い影が奇怪な律動で動いてはとまり、とまっては動き、足元にひとかたまりの蠢(うご)きがほとりと飛沫(しぶき)をあげて落ち、わくわくわくわく水をひっかく姿が溺れる大ぶりの南沙蟹(なんさがい)になると、岩全体がひしめきあい逃れようと数知れない蟹の甲羅の殺到(ころも)になって、そのぞよめく生き物の逃散の本能が、沁みて痛い怖気(おそ)となって私を塗りつぶした。はしり逃げるけはいがきゅうきゅう鳴る甲殻の一齐の軋りとなって、自分の鼓動が聞こえ波音が聞こえ、溺れていた筈の蟹のいっぴきがなくなっている、ころになると、もう、見渡すかぎり何もいなくなった。蟹たち

おく、ふじ色の稲びかりが空と海のあいだをひとすじつらぬくと、一瞬間だけ、まばたきよりも短いあいだ、ぬばたまの夜空がうす紫から黒紅のかぎりない階調(かいじょう)にあかるむのだった。遠く。耳癢(みみかゆ)いられたように音なく。ふと鼻先に親指をかざすと、そのかぎりなさは、その爪の幅にくつきりと乗った。まだ、鏝のにおいがある。その日から卓上、A4の白紙一枚の上に漂着したライターが四つ並ぶまで、そう日はかからなかった。さらに簡体字のものが一つ、ハンブルグが書かれたものが一つ、そして消えかかっているつこい活字の字体のせいでにわかには判別(はんべつ)しがたい、アラブ語ともタイ語ともヒンドウ語ともシンハラ語ともつかない文字が二列にならんだ紺色のものが一つ、最後のものが幾度目かの図鑑を捲る気(き)をさそった。インド洋上の赤道(えきだう)反流に乗ってインドネシア西岸に達したとして、さてそこから北上するものなのか。アガラス海流で南下、モザンビーク海流さらに西オーストラリア海流に乗り換えて、さてそれから、どうする。素人が、図鑑の概略図(がいりやくず)ををにらんでも搔撫(かむ)での知識、こちらの腑にも落ちてはくれず、そして結局のところその岸辺(かたべ)で抛(な)れたものとは限らない、あるいは船上から捨てられたのかもしれない、というところでも間に合わせることになった。その文字から何か消息を辿ろうにも、どの文字もなにひとつ、酷薄(こくはく)なまでに読めないのだった。われわれのこの読むことばが印されたライターたちも、黒潮から北太平洋海流に乗ってハワイやミッドウェイの岸辺にたどりつき、あるいはカリフォルニア海流に乗り換えて南下し、彼の地の人々に読みえぬ文字のおもてをつきつけているのだろうか。

開け放しの窓の外から真夏(まなげ)に育(お)りきった葉むれの青い辛味がびりぴりと寄せてくると、森が發散(はつかん)する粘(ねば)り脂(あぶら)つこい腐乱(ふらん)のにおいとまったくおなじい、ひとめにはただうすぐらい濡れいろの、硬い岩肌のおもては、そのじつ、極小の、退紅(あせう)と鉛(えん)いろとわか緑と灰白色の、無限の点描(てんぼう)できていた。今度はその逞(たくま)しい点描の織物(おりもの)じしんが、突然、ふつふつ、ふつふつ、小泡(せうはう)をふきだす。五億年はいきる生き物の、まれな呼吸(こそ)のように。

五億年などとめかしこんだことを言うまでもなくて、この地球をこの両手につつめるメートルの球に縮めると、対流圏(たいりゅうけん)はざつと一ミリの皮膜にある。この一ミリのなかですべての気象(きさう)はうつり、すべての生き物たちは飛びまた這(は)っている。生物圏(せいぶつけん)だからこの世ははかなくて、というのも浮ついたそら言(こと)で、そう考える人の身の六割以上を占めるのは水だが、この目前の海は一三六万立方メートルの途轍(とつご)もない水の集積(しゅうせき)なのであって、この地球上の水の九七パーセントである。が、これもまた地球全体に存在する水のほんの十パーセントにすぎなくて、残り(のこり)は地殻(ちかく)とマンチルを構成する固体の鉱物中に結合してたくわえられていて、これは液体のすがたをとっていない。——こんなことまで覚えていやがったか。蟹をこわがるこの一身(いっしん)が。おお、大いなるポイントスよ、オーケアノスよ、三千のオーケアニデスよ。

藻(も)ぬめりに足をとられてよろめき、膝までなめて塩はゆくする鹹水(かんすい)の反射にすら灼(や)かれ、剣山(けんざん)めいてつれない岩肌(いわだ)を快調(かいてう)にかけていく舟虫(ふねむし)のづづぐろい長さふとさにおどろかさされ、とりまくすべてにいわれのない卑下(ひげ)と怯えをかかえながら、ここまで来てしまつて、とつて返すにせよ同じ道なき道を辿(たど)って浜(はま)に帰り着くことができるのかどうか心がやけに細(こ)つて、そうまでしてどうして岬(さき)の突端(とつたん)まで行こうとしているのか、皆目(みな)わからなくなる。うすのろな窺(うかが)い足(あし)のはずが、棒立ち(ぼうだち)になって呆然(ぼうぜん)と海を眺(なが)めている間合

白藍に映えたかと思うと、天球の大水槽に黄いろのインクがふつ

ふつしだり落ちて、いくすじも対流しながらひろがって薄まり、やがていちめんの麦酒ビールいろがかがやいた。すこしずつ、すこしずつ、熟れていく。赤らんでいく。灼けて。

あしゆびを濡らすほどにも近いのに、どこか遠鳴りのようになる汐音のおだやかさが、この身の底を静かにかきみだしている。そしてまだあかるい。踝までもとかぬ寄せせる浅波が透けて、今もほのかに青みをだしている。かすかにうねる潮泡の文様を透かしながら。そして私はその一面のうす手の透かし彫えいを抉る別の青をみた。半ば砂にうづもれて、指でふれるとかたい。爪を立てて引き抜くと存外にちいさな、丸みをえがいてひらたい、勾玉めいた何か。海硝子シクリンだ。大海をわたつてきた忘れな草いろの硝子の破片は、うっとりとなめらかに摩滅して、ものういような光を底にほの照らせている。手にとると、ゆびさき、わずかにこころよく粒だち、ざらついていた。どこから来たものか。いくらゆかしくても、これは投棄物にほかならないのだった。塵芥チリカのはずだった。ついに海なかでなめらかに摩滅したガラスの塊のようになつたすじがきである。と、誰かの引用が沸いた。ヴァージニア・ウルフの、何だつたらうか。そしてそれは何の筋書きだつたらうか。

——ヴァージニア・ウルフ、と。私は果たしてそれを読んだか。玩弄ワシヤウをさせたたくても、捨てられもしない。ゆびを四つおつてかく握りしめたまま、そのまま暮れていく方へゆく。朱金アウロウのまぶしさを浴びてゆく。不意に前方、やや陸にあがつたところにある、大ぶりの流木の影ともみえた何ものかが、形を変えた。巨きい。ふとぶとと、ずずぐろく、生きては居ないものの重さですつしりと横たわっている。人か。ぱっくり開いた、巨大な嘴くちばし、人にこん

列にそつて、ためらいの甘さを一歩ずつ殺ころして、あるいていく。ない。どこにも。あの屍体はどこだ。もう一度ひとつひとつ、在り処をたしかめなおす。ここは北浜、抜けてきて渚、歩いてきて、海硝子シクリンを拾つたはここ、やや沖の岩かげはあれ、ならばここ、の筈はずだ。ここには、ただ乾ききつて鉛白の砂が、ひらたく風の水面のようにおだやかにうねっているだけだった。わからなくなつた。昨日のあれが夢まぼろしなのか、今ここが夢まぼろしなのか。今ここが。今が。私一人で見たことは、見たあかしがない。ならば、いま私が見ている今は。私は。嘴が鋭角のなかに牙の鋭角をむき出していたところを踏むと、その足先、ひたすらにひとしなみに押す烈しい光圧が、この身の影を信じがたく小さくまとめている。のろろと座り込むと、ちよつど胸びれの鉄板の尖りが鼻先に来た。腰のあたりで嘴が割れ、足を伸ばしても、握りつぶした花瓣のようにしおれた尾びれにはとどかない。このままうっとりとした横たわり、死んだ海豚の場所におのれも身を重ねてみるなどということは、しない。夜のあいだ、潮が攫さらつていった。そうに違いない。打ち上げられてきたのだから、攫さらつていくこともできるはずだ。と、急いで、理を無理じいして、勝たせた。太ももでもない膝でもないあいまいな箇所のおかげに、にぶい琥珀いろの細粒があつた。その三ミリほどのプラスチックの球を、ひとつ拾い上げると、ひとつ、またひとつと目に入ってくる。あるものは白濁して、あるものは灼けて黄ばんでいる。レジンペレットだつた。視線をなげると、包帯がなかつた。疵痕すら。

ひろい卓の前にこしかけて、そこから入り込む光の加減をいぶかしんだ。どうして帰ってきたのか、知るつもりはもう、ない。

なものがあるか。

死んでいる。まず死の嵩がある。純粹な嵩と重さが。いや果てしない崩壊の、腐乱の、破砕の、その雪崩れゆきだけが、途方も無く。嘴が異相を削いて、その付け根にただひたすらな暗闇が底知れず空いている。眼窩か。鉄鏝テツキをふいたような色、そして鉄鏝そのものの肌目、とどころ粉吹き、時にうすくめくれあがつて、無機の味をだしている。これもくろく錆びた鉄板を乱暴に突き刺してあるのが、影になつて伸びているさき、ほのかに銀色になつて、そして急激に細く尖つて、握りつぶした花のようによくしやりと潰れていて——尾びれか。するとこの鉄板は胸びれか。嘴にはぞろり、不揃いに欠けた、あかちやけて尖る歯が居並んでいる。海豚だ。途端に私のすべてを腐臭が包んだ。蠅ハエがひくく舞っていた。血を煮ごごらせ、乾かし、また濡れさせ、さらに乾かした匂いが立って、西ぞらは夕焼けていた。くねる油彩の筆触で、くらい紺鼠の雲がたなびき、ちぎれ、もまれ、飛んでいく影が、空を二つに割っている。まだ暮れきれぬ天頂ちかくは、光を落とした海の碧と青の蛋白石、そして日の落ちる沖からは、さらに沖にある雲くもで無限の明暗をにじませながらひかるいろは、まっつき鬼灯おにとうなのだった。このからだも、この浜も、この死体も、鬼灯にひかつていた。執拗にうち叩かれた錫がねのおもてのように皺しわよる海が、その同じいろを皺ごと貯めている。そして死んでいる。

確かめなければならぬ。昨日のように、そつと退しりぞつて息をころし、のがれてきてはいけない。ふとふりむいても、厳然としてそこにあるあの屍体を、あのままにしていはいはすがない。深緋の海を渡り、岸边にうち流され、いまは白い紙のおもてをうめつくしているものたちが、それぞれに身の丈分のうすい影を伸ばしている。ひとつかみのレジンペレット、プラスチック製品の間中生産物であり、残留性有機汚染物質を含んでいて、生き物が呑む。同じ分の発泡スチロールの粒また粒が、同じ大きさの影を截然とならべている。いづくからか流れ果ててきた基盤キパンの脚あしの実は、かたい、菱型を息吹き入れてふくらませたような、それとも飯をつつんだ蓮の葉のような、男の拳大の赤墨いろだ。斑芋アザミモ貝の、芋というよりもすこし独楽のような姿が、子どもの小指ほどのながさの、筆先を四角に切つた筆で黒を押していつてような文様をかせている。貽貝イガイのようにみにくい、それよりも奇妙にまめかしく、ほそながく、赤味の勝つた紫いろと藍いろをほの照らしているのが琉球雲雀貝リュウキュウソウゾクガイか。鴉カラスいろ、珊瑚いろ、真朱マユに唐紅カラコ、すこし暗んで照柿テマリいろ樺いろ、くつきりと、すこし剥けて皺よるところまで、息を詰めていいいに拵こしらえた女の爪がひとまじりうす高い樺桜貝カハナガイだ。そう、煙草のフィルターはまれに見かけた。そして使つかい捨ての注射器が二本、直線、鉛筆より細身で、片方は赤いキャップがいつそまがましい。アルミ罐が長いあいだにわたつて濡われ、ちぎれ、腐食してこまかな穴が空き、寸断され、にぶくかすれた銀が曇らわしくて、もはやプルリングがあいた蓋の丸みしかかたぢがない。そして、このはつきりとまるまる太つて手足みじかく、ひどく古形フエティッシュの物神モノガタリにみえる、木彫の偶像はなにごとか朽ちきつて顔おもてもあきらかならぬ。それとも、手足は折れてなくしたか。足があつたとすると、丁度男の二の腕ウデばかりの大ききになるはずだつた。南箱河豚ミナトハナラの屍体はしろめを剥き、白はだに灰色の六角形の敷き詰められたつつましやかな点描がうちつづ

いて、角をのぼし口を尖らせて静かにかすかに痩せ、きつかり三十七センチメートルのむくろの、完全な乾燥である。白骨化して甲羅だけになって、旧い高貴な細工のものようだ。死よりも黒いかたまりに、ならならにらにらしくべつべつついた甲殻が集っていて、実にうとましい、それは烏帽子貝を集らせた廃油ボールだ。海面にながれでた原油が、はるかにでろつき、すべり、漂流し、波風にもまれて何か芥を芯に固まるのが廃油ボールであつて、それに烏帽子貝は性器に柔毛のように無数にはえてぎらつく疣の見憎さで集る。豪華に磨かれて落ち着いた朱一色のつややかなはだに、上海の工人がわざを凝らしたような鬱金いろ、おさえたはなやかさの模様を描いているのが、滑々饅頭蟹の甲羅で、これは毒で食べると死ぬ。Atergais floridus という学名はふさわしい。細手でうすい、女物の花車を腕時計は、もとは銀いろだったのか銅まじりのピンクゴールドだったのか、鉛いろに錆はて、その金気のおもてはみなごつごつとざらついて、不思議なくらいに盤面のみ疵ひとつなく、針はきつかり十一時二十五分を差して完全に死んでいる。日付を見ると、見なければよかったと後悔する、誰もが知るあの日である。が、こちらの黒いシリコーンが水垢のようにうすくもっている、安物のダイバーズウォッチはデジタル表記で秒数を一秒一秒いまでも刻み続けていて、やけに生きている。瑠璃貝はちようど人差し指と親指でつくった輪の大きさ、ぶつくりまると、紫から淡藤いろ、白へと移りうちつづくならかな塗りで、瑠璃よりもはるかにあわく、ほのあかく、海月を食う。食っていた。漆喰を塗りたくられたようにべつたりと青錆が盛られて何も読めず、しかしなおくつきりと真円の形をして、丸みのおびた正方形様の穴があいているものもあれば、青錆くる錆のまだら、

ン・スーパーヒーローは赤一色、すべて染料は溶けてしまったのか、わずかに眉と喉のあたりに白人の肌のいろが残っていて、ほこらしげに大きくおおきく笑い、ゆたかな筋肉質で、腰からしたがない。どうして、こうも、人くさいのだろう。兵隊くさいのか。そして古びて大ぶりの褐色の瓶が透かしてみせるものうい容積のなかの二葉の紙片である。大海をわたる長いながいあいだ日焼けして、乾反つてうすく焦げた色味をおびている。投瓶通信だ。しかし海の光のはげしさがインクを蒸発させて、文字は消えはてしている。ただ痲症な、おそらくは万年筆のはげしい筆跡が、紙の上になうねっていたことがそのおもてから伝わってくる。ところどころ筆圧がつよいところに、ブルー・ブラツクのインクの跡が残っていて、二葉ならべるとこまかによじれる短い点と線のひろがりとなって、なにか訴えていることはききとれる。が、何の訴えなのか、どこからの訴えなのか、そもそも何語なのかもわからないのだった。つい最近のものなのかもしれず、百年前のものなのかもしれない。わからない、ここに届いていいものなのかも。

ダイバーズウォッチから電池を引き抜いてころした。生きているもの、動いているものは卓上からなくなり、死骸だけになった。しかし、ひとつずつ、刻一刻、また腐って、また朽ちていく。崩れていく。いつている、今も。

何という朝だろう。そう、時はながれているはずだった。そうではなくては、こうまでひかる朝は来ない。そして夜々の濃い、ぬるい、あまい無慙な支配も、ひがごとではないはずだった。しかし、どこまでが今日で、昨日で、明日なのか、あやうい。どれも

何か海底をぬめり泳ぐ蛇の模様のようになって縁がゆがんでいるのもあり、赤錆に蝕まれてひらたく、一角をむしり取られたようにねじまがって欠いているものもある。奇妙に錆がない、铸造されたばかりとおぼしきかたちをして、黒ずみだけのものも。ひとつは天元通寶、ひとつは常平通寶、ひとつは大観通寶と読める。たしか、大観通寶は北宋の通貨ではなかったか。風流天子、九百年前だったろうか。桃鳩図はみた。いつ誰に誘われてのことだったか。蓮葉菓子麵麩は雲丹類で、その象牙いろの空殻はフライパンにまるくながしたパンケーキの、ややうすい生地のように丸く、そしてやわやわと縁を波打たせていて、真ん中に五葉の花紋が押してある。直径0.9mm長さ4.5cmのM16自動小銃の薬莖は真鍮製二つとも、そもその金がところどころ剥けて、ゼンたい朽葉いろにうつすら錆びかかる。すばらしくひらたく、すべっこく、かたく、まるく、何年も磨いた大理石のようにかがやく藻玉の種あずきいろは、掌にきれいにおさまっている。美保と、おそらくかすかに金とだけ読み取れる木切れは、明らかにのおのずからなるものではない鋭角に切られていて、神札と知れた。おそらく美保神社と金刀比羅宮のものであろう。なにゆえに海に擲ったか、それともそれが正統な儀式なのか、わからない。そしてまたライターである。赤地にしろくAutomobiles Citroënと書かれたものもあれば、青地に白で현대자동차 주식회사と書かれたものもあり、地に赤で萬事如意と太平楽なことが大書されたものもあって、いずれにしろ出処は知れないのだった。そして黒い肌、厚いくちびる、巻いた短い髪、黒人の通念通りのおさない少女の人形は三等身、髪の毛の半分はむしり取られ、片目はしろく色ぬけて、右腕がないのにくちびるの差し色だけがつやめいている。アメリカ

が同じではなくて、どれもがひしひしと移り、かわり、くさり、また濯われてきよくなる、その遷つて減つてまたふえていく姿が、その莫大な運動そのものが、人のはかる暦の、時のくぎりをかすれさせ、破線にしていくなのだった。あれはいつのことか、いまは何時か、とあやしみかかると、目の前にあるものが未来なのかもしれない、あるいは果てない過去なのかもしれない、しかし夢想は断ち切られている。おのずと、でもある。しかし、活字の字体のせいかもしれないが、このアラブ語ともタイ語ともヒンドゥー語ともシンハラ語ともつかない文字がいちめんにも匍つている使い捨てのライターやこまごまとしたプラスチックの破片も夢想をゆるしてはくれなくて、助かるおもいも、助からないおもいもするのだった。それにしても、あれはいつの日のことだったか。明日のことではなかったか。その明日とは、いつだ。

冷えびえと黝いまでの青みを出していつ何時かわからなくなる天空の醒めて冴え切ったあかるさが、差してきたばかりの筈の陽がゆつくりとなだらかに焼灼する肌おもてのひりつきを連れて来て、掻きみだした。わかつていたはずのものを、わからなくした。何かをしんじつ見せた。そして何かを誣いた。そのままで、もうよいのだった。通れ匿われていることが、たぶん千年も前のことかあるいはあつてなくあどけない嘘なのだった。もとより足取りは滄浪、もうひとつ先にある浜に行つてみようと思ひ立つたのが、もういつかも判らなくて、そらを両側から押しせばめる南洋のみどりの影、じつと凝らすまなざしだけが、黒みのなかにほのかに跳ねる無数のこまかにさやく緑をさぐりあてるその樹々の影法師どもの迫りのあいだにひかる、冴えかえつた空の青みをさらに縦に裂く、裁つ、ひゅんひゅん、ゆんゆん、向かう彼方へと伸びゆ

える。ためらいなく瓶を割ってその紙片をひらくと、くつきりとした筆跡でこうあった。

Bonjour. Je m'appelle Agnès Jaquard. J'ai 12 ans. J'habite un petit village isolé au bord de la mer. Je m'ennuie à la maison. Ma mère m'agace avec son bavardage, mon père s'amuse et prend plaisir à me toucher les seins. Y en a marre. Si vous trouvez ce message, répondez-moi.

かさなのだった。混乱はない。すべてはしみひとつなく澄明で、すべてのざわめきひとつづつが、うれしんでいた。

先の浜のさざ波のくだける鳴りがひとあしずつ寄ってくる、いちめんのうす緑のかたまる、燃え立つ姿があかるく、すくよかに豪放にうちひろがり、ながめれば海浜の見渡す限りをもやす火の、とがりひとつづつ、一葉ずつは婉約、こぶりの葉があつ手、くつきりと単葉の円味がきよげ、隣どうし身をぶつけあつてはかちかちと鉱物のおとを立てそうなのに、しおっぽい風の吹き寄せるときおりに温順に、群れむれ、ともにやわらかくふきしだかれて、さらさら、さらさら、その若みどり色の花やかさのみ、戦がせているのだった。

先の浜は今日もまぶしく灼かれている。満ち切った潮の波は風いで洩たるみ、ただ鏡面となって燃える日輪を映し続けている。鏡面の上の異物はみはるかしやすい。泡立ち、波にゆれ、すこしずつ寄せる引くにつれて岸辺に近寄る何物かを、迎える気になった。コルク栓が蠟かためられ、鴨の羽のような緑いろがくすんで、うすにごるそのワインの瓶が透かすなかに、一葉の紙片がみ

だろう。われらも通り過ぎてきた、身を細らせる絶望と無力だろう。南仏の住所をうちながめて、場処の見当をつける。が、この身のうち、彼女にむけてかすかに動こうとした救けの手は、即座に消えた。10 Juillet 1938という日付が見えた。一九五八年七月十日、半世紀以上前だった。アニエスは七十歳になっているか。

一九四六年生まれのアニエスは、戦後の混乱をどれくらい見たであろうか。十二歳のアニエスは数ヶ月後に迫るシャルル・ド・ゴールの第五共和制の成立を見ただろう。父の手から、村から逃れることはできたのか。長じて二十二歳になったアニエスは、五月革命を見たのだろうか。そしていま、どこでどうしている。生きてるか。

bavardage は複数形ではないか、Y en a marre という言い方はどこでするものなのかどうか、あやしまれたが、字引ひとつないこの孤島の陋屋では、どうすることもできない。そんな詮索こそ、分際ではない。と、まなくときなく、今度はまた葦めいた細い鎗葉が真夏なのに枯れ色の、あの小路をぬけて、ちようど宝貝を拾ったあの場処で、今度はまあたらしい、プラスチック・ボトルの投瓶通信をみつけた。ただ、よくあるプラスチック・ボトルに手紙を押し込んで、元通りにキャップをしめて海中に投じただけのものだ。このような略儀で、このような遠くまで、届くものか。学習用と思しきノートをひきやぶいた跡までまなまましい、鉛筆書きでこうある。

本当の父親ではない、ということをはじめて聞かされました。

お父さんは癌で、もう助からないとお医者さんはいいます。青森市民病院に入院しています。長くて、半年だといっています。もう、

手紙はむいものだ。誰でもよい誰かにむかって、着くかも

判らぬように海中に投げられたものであつても、送られた者を誰何する。誰でもない誰かでは、いられなくする。いつどこにいてもいい筈のこの誰かを、日付と場処を詰められた私に戻す。こんにちは。わたしはアニエス・ジャカルといます。十二歳です。海沿いの、人里離れた小さな村に住んでいます。この家に嫌気がさしています。母のくだらないお喋りにはいらいらするし、父はわたしの胸を触ってよろこんでいます。うんざり。この伝言をみついたら、お返事下さい。と読めた。あまりにあかるい夏の陽が刺してきて、痛い、しろいおもてに目をこらしながら読んだ。読めることにまず驚かされた。フランス語の手ほどきをしてくれた懐かしい人のおもごしも、その日々も思い出されて来て、そしてその日々を手放してしまったおのれの迂闊さが、語学をも使い物にならなくした。だが、十二歳の少女の、おさない、おそらくは両親に悟られまいとしてか、急いで書いて殴り書きしたのであるう乱れた筆跡の文章くらいなら、今でも読めるのか。こんな、から手の私にも。しかし、何というありふれた、しかし切実な危機

しゃべることもできません。弟にはシヨックだったようで、口をききません。お母さんは泣いてわたしにあやまってばかりいます。なぜあやまるのかわからない。いつも何も話さず、黙って、わらつていて、すばらしいお父さんでした。きらいだったこともあるけれど、そのことにやつと気づきました。死んでほしくない。神様、どうかお父さんを助けてください。まだ、お父さんに、話したいことがあります。

海の神さまへ、

二〇一四年六月三日 木戸明美

どうすることも出来ないのだった。どこかで聞いたような話ではある。が、どこかで聞いたような話を生きているものなのだ。われわれは、いつも。人に起こればよくある話、陳腐な話と笑うことができる。自分にその「話」が起これば、そうはいかない。通俗を通俗とすることができないのが、自分というものの身勝手さで、それがわかつていても、では悟り澄ますことができるか。

このような通俗がおのれの身に起こるとはと、せせら笑うことがこの木戸明美の父親はもう死んでいるのだろう。この木戸明美の弟は泣き止んだらう。この木戸明美の母は謝りつづけているのだろうか。木戸明美は、何か父と言葉を交わすことができたか。最後に、一言でも。そして、海の神などというものではないこの私には、どうすることも出来ないのだった。そして、青森市民病院は、私が生まれた場処だった。君の父親が死のうとしている病院で生まれた、ただの人間だ、私は。海を支配する力もなければ、君の父親を救うこともできない。君をも。どうすることも出来ない

い。と、過去の木戸明美に語りかけた。木戸明美は、どうしているか。何歳になつてゐるのか。生きてゐる、か。

何をしようとしてゐる。何を。私はA4の紙だけは豊富にあるこの陋屋で、一本の万年筆と二つのインク壺を見つける。硬く詰まつて、インクが落ちてこない万年筆を、ひとかかえほどもある銀色のポウルになみなみ水を汲んで、そこにしずめておく。ひとすじ、ふたすじとロイヤル・ブルーのインクの筋をゆらゆら吐く。絹の糸をひきさいて散らしたような、幾筋もの青の曲線がゆつくりと対流して、やがて隈ない、透明な均一の、うつくしい青碧の水でみだされて、ペンはしずかにしずみきつて、身を横たえてゐるばかりになる。何をしようとしてゐる。引き上げようとすると、最後のこまかな泡をひとつ、ぷくりと吹く。ていねいにハンカチーフで水滴を拭き取つて、夕焼ける日差し、あか橙一色に熱する一室で、インクを吞ませる。何をしようとしてゐる。何を。私のインクを流す番が来たのだ。この青い液体を。そしてどうする。海に流そうというのか。それはあまりにも、夢想が過ぎないか。安易な叙情ではないか。ロマン主義ではないか。構わない。何とも言えはいい。私は書く。

*

いまから書こうとしているこれを——書き終えられるかすら今はわからないこれを——誰が読むのか私は知らない。私は、あなたが誰か知らないし、知るすべもない。おそらく、あなたが誰でもないのだろう。知る必要もないのかもしれない。あなたにとつ

の県境から津軽の北の海までをつなぐ。住民が今でも禪ぜんの如く自嘲する所以である。中村川の上流には鱒ヶ沢又鬼が棲み、下流には海の民が棲む。棲んでいた。クシビキの家はどちらの民にもいる。中村川はその行き来と交易の動脈だったと聞いた。津軽統一を果たした津軽為信の四代前の祖、大浦光信が本拠を置いたのはこの中村川のほとりである。父の生まれた田代町は秋田県の北辺で、鱒ヶ沢と境を接する。

父方とは縁が薄い。簡略にとどめる。父方の家は秋田の北の山奥、かなり昔から高台の平地で稲作が行われている土地にある。ひろい庭を茫とながめくらししていると日本羚羊が事も無げに顔を出してうるついたり、道を渡つてすぐ隣の畑で黒曜石の鍬くわや明らかに手が加えられた石の手て、斧きや子供にでも縄文のものと判る土器片や青さびて文字がよくは読めないがおそらくは中国のものである古銭などがいくらかでも拾える場所、それでも発掘調査が行われたという話は聞かない。熊も鹿も兎も狸も食う。私も食つた。猿も貂も山鼠も大山椒魚も熊鷹木鳥も狗鷲も角鷹も晨鴨も人里にあつてめずらしくない。水遊びに行くと、川には岩魚や山女魚や杜父魚の細い影が泳いでゐる。水底を大量にあるいてゐる水蠶が滅多矢鱈と大きい。熱帯の島で見る御器嚙おんぎそくらいは大きい。道理で、八月も終わりにになると巨大な鬼蛸おにたこや銀蛸ぎんたこが若草いろ一色の田のおもてにすばらしい金銀の軌跡を描いて低くひくく飛ぶ。身を曲げ円をつくつて交尾しながら飛んでいるのも見た。森に蛞蝓なつむしがいるが、だいたい切つて供される牛の丸腸くらいある。と言つて判らなければ短めの紙巻煙草を六本まとめた太さ長さだと思つてくれよ。うすきいろくて、塩をひとつかみ持つて駆けつけると居ないくらいは逃げ足がはやい。幼少時、関東で見

て、私が誰であつてもいいように。しかし、私は書かずにはおれない。そして、あなたには、読まないでゐる権利がある。続けよう。

或る日の午後である。男たちの影が集まりだし、荒い息を吐いて次々とトラックに乗り込む。手に手に銃を持つてゐる。ある者は猟銃、ある者は軍用銃である。率いなのは私の大叔父、源四郎だ。頭蓋が割れるような奇声をあげていたと聞く。四台のトラックはそれぞれにわかれて隈無く投票所を襲撃し、ひがな一日津軽をめぐる、威嚇射撃を繰り返して、邪魔する者どもは銃床で殴りつけ腹を蹴りみな血まみれにして地に伏せさせ、すべての投票箱を集めて、夜半津軽海峡の海に捨てた。顎を割られてものが食えなくなり病み衰えて死んだ者、流れ弾に当たつて失明し公職を追われた者、腹を蹴られたひとりが女で流産してその後石女いしめになって離縁された者もあると聞くが、なぜ私まで伝わつてゐるのか、知らない。返り血まみれの源四郎は大金を分配すると、十年は北の果ての刑務所から戻らなかつたと聞く。一九四六年四月十日に行われた第二十二回衆議院議員総選挙、大日本帝国憲法下最後の選挙であり、戦後初の総選挙であり、日本初の普通選挙の、青森区での出来事である。虐げられてなお保守盤石の津軽の根は源四郎の大叔父の胆力にあるなどと聞くが、そこは伝説であろう。私の母はこの年の一月七日、津軽の鱒ヶ沢に生まれた。櫛引の血を引く一統である。私の父はその九年前の同日四月十日、いまはない秋田県田代町に生まれてゐる。

白神山地に連なる四兵衛森から流れ出し日本海に注ぐ、中村川の水系全長四五キロメートル、流域面積一四九キロ平方メートルがほぼ鱒ヶ沢であると言つていい。南北に長く、現在の秋田県と小さくて細くてのろいそれと田代で見ると同じものだと知らなかつた。郎党、男女とも奇妙なくらい高い鉤鼻かぎばなで、瞳の色が変に薄い者も少なくなく、一人残らず山刀を下げてゐる。鋼の身が子供の小指くらいのおあつさ、女の肘から先ほどの長さあるもので、鉤のように刀身が角ばつたものもあれば、又鬼が使う山刀と同じものであろう和包丁の大親分のようなものもあつた。斬るのにも割るのにも突くのにも殴るのにも使えて至便である。父の鉤鼻は一族のなかでもとりわけ高かつたがこれは受け継がなかつた。小ぶりの鉤様の山刀を愛用して、関東に越してきて山に入ると古びた腰帯に下げて歩いた。誰かから受け継いだものと聞かされたが、誰だか忘れた。父は無事故無違反の人で自動車の運転がしごく達者だったが、免許を取つてすぐ月輪熊を二匹轢いて躪り殺してしまつたからだと聞いた。雌熊を轢いて降りると向こうに三匹の仔熊が悲しそうに啼いていて云々は法螺とまでは言わないが初老の田舎男の酔余の付け足しであらう。よくあることだ。その二匹はむろん鍋になつた。祖母の山刀は大ぶりで尖つてゐる。母が貧血気味と聞くと裏庭に連れていく。五十羽くらいの比内地鶏がみじかく真紅の鶏冠と赤銅の羽と漆黒の尾を夕陽にかがやかせながら走り猛つていて、その目は黄水晶に黒点を打つて、表情が完全でない。どういう骨があるものか、祖母は造作もなく一匹を捕らえるときいろい足をわしづかみにつかんで、抜刀した横さまの一挙動でその長い首をあざやか叩き斬つて、胴体から奔出するみるみるあかくなる血をコップにとつて母に強いて吞ませるのだった。血の赤でくちびるを染めて、いつもの險を作つて飲みなくそうにしてゐるのを眺めている場合ではなくて、そのまま足を放されるなり滑稽にも首を失くしたことに気づかず血を振り飛ば

しながらかけていく鶏の羽を追いかけけるのが、おさない私のこの上ない愉しみだった。むろん、捕まえてつぶして食う。殴る蹴るすると味がわるくなるから、そっとおさえて抱きとめねばならない。胸のなかで無い首をせせせとふるのも所詮けだもの悲しさ、このせいで、私の顔は返り血でずずろく染まった。鼻孔のなかに染み入り固まると、すこしく往生させられた。長じて人は首を斬ると動かなくなると聞いた時は意外だった。折角首がないのだから一駆け駆けるとおもしろいと思う。私が斬られたら走る心計である。男の系字は定で、一族の男はみな定某、某定と名乗っていた。祖父の本名は聞いていない。ただ仮名を萬乃介と言うと聞いている。いや、或いは曾祖父だったかのかも知れない。おそらく萬乃介定某といったのだろう。その曾祖父だか祖父だかは隣村との無体な合併のおりに紛擾が起き、ひとときは若い衆の刃傷沙汰で二村あげての騒乱めいた仕儀に及んだのを威敵を以て止め新村の村長に推挙され、就任したという者もいれば断つたという者もいて、さてどうだったのか。ともあれ、世界中の村落どこにでも転がっているこのような家の神話の主人公ではある。ただ、寄合の帰りに二升の酒を難なく飲み干し、雪中帰宅すると玄関の三和土に倒れ込んでそのまま高野家の者どもがふと月光にあかるむ庭の雪をみると足あととは定規でひいたように直線、千鳥足の風情など微塵もない。どんなに酔っても乱れることはなかったということとは本当で、そういう話が出るくらいの人ではあったのだろう。その萬乃介、もつと分け入って山奥の村落の縁者の婚礼に出た。よくあることだがその村落も同じ苗字の家ばかりで、確かその婚礼も同じ苗字の家同士のものではなかったか。血の婚礼、とはならず、二升だか三升だか飲み干して引き止められたが翌朝

なのか。その曾孫だか孫だかは以前元麻布に住んでいた。麻布という東京都心中の都心、六本木もほど近く、高層高級マンションを思い浮かべる向きもある。しかし白金から麻布にかけての一带は長く、無論一概には言えないにせよ殆どの場所は庶民の街あるいは貧民街にもひとしい場所であって大正時代くらいまではほど近い浄土宗大本山芝増上寺の施しを受けていたらしく、今でも所々古びて手狭なアパートメントが群れている。大使館が近く韓国やアルゼンチンやインドの留学生たちが貧しい住まいに数多く滞在している。貧困と建築に詳しくて口の悪い友人にこんなアパートメントはブラジルかメキシコでしか見たことがないと言われる有様だ。その様な仮住居で、都会の真中で、まるで逼塞するように明け暮れしていた。この曾孫はてんでだらしがない。大した量でもない酒で千鳥足、途中からまるで記憶がなく、何かまたしでかしはしなかつたかと翌日青ざめるといふ日々だ。が、見るのは狐ではなく狸だ。元麻布と東京タワーのあいだに、麻布狸穴町という街がある。ロシア大使館をとりまく一辺で、ここから歩いても十分もない。この地名には諸説ある。かつて狸があまた住む洞があった、否「まみ」というのはむしろ穴熊のことだ、否「馬見町」が訛つたもので云々。しかしここに昔、魔魅が住んでいたという説がある。無論人を食う魑魅魍魎の類で、『太平記』には乱れた世の中をなげいて「天下皆魔魅の掌握に落ちる世に成らんずらん」という文言がある。麻布で狸を見ていた。紛れもなく狸だった。一月のあいだ四度。一回は女を送る途中、東京タワーのふもとで。二回目は散歩の途中、麻布の善福寺の前で。三回目は朝の四時、もう白けた鉄の壁に覆われているばかりの今はもうない麻布温泉の前で。遂には、部屋へと向かうメキシコ風のビルの

に用があつて、深夜無きがごとき山道を徒歩で帰ることになった。ほとんど橋の体をなしていない、目くらむような断崖の沢に毛羽立つて土くさい、腐つたような太綱を二本張つただけの吊橋を渡っていく。満月があかるんでも暗い真夜中だ。ふとそう遠くもない森影のなかに火の手が見える。明々と燃えている。山中も山中、樹々が爆ぜる音がぬばたまの闇のなかにくつきりと響き渡る。あれは、村々が共有する炭焼き小屋のある場所だ。焼けている。それだけでも大事、山火事さらに延焼となれば、山を糧とするものなかに飢える者も出かねない。途端に走った。走った。走った。健脚だった。その腰から国体選手を幾人も輩出した男だ。なかに、一万メートル競走当日遅刻し、スーツに革靴姿で登場して優勝した者もあると聞く。その父が走る。いくら暗夜とは言え山育ちの勘がある。濡れたようなかくろい真闇の、険阻な山道を一度も惑わず転ばず二時間ばかりで駆け抜けた。村の男どもを叩き起こしてとって返してまた二時間を走り抜けると、そこに火の手はなかった。何も焼けていなかった。三日月が滲んで夜空を群青に染めていた。一同、萬乃介さんでも狐に化かされることがあると、と、山中大笑いしたという。狐は食つたことがない。化かされるからではなくて不味いからだと聞いた。先ほどは満月と言つた筈だが今は三日月で、これは祖母と父と伯父と、あと群れむれる一族の男たちの誰なのか判然としないが日露戦争だか太平洋戦争だかで左足首から先をなくした老いさらばえた男、軍隊に行つていたおかげでこうして訛りなしで話すことが出来る、と語る頭もると顔を人ならぬものに握りつぶされたようなあの皺くちゃの老人、で、すこしずつ伝承が違ふのである。それにしても、この家の話の夜には、常に月が浮いている。月が無いと死ぬ動物

階段の真ん前で見たときにはおののいた。同じ狸、だろうか。いつも麻布で狸を見ている。不意に狸と目が合っている。狸が近づいている。奇妙なことだ。何かがおかしいのだ。人通りが絶えない街だ、いくら夜中とはいえ誰も通らぬという事はない、二十四時間開いている店も少なくない。なのに狸と遭遇するときには周囲に誰も居ない。必ず、一人も。夜空にあかあかと東京タワーが光り輝く、六本木ヒルズのビル群が青々と虚空に浮かび上がるその路上で、きらきらしく目を輝かせる瘦せた狸どもと相対している。その都度、一対一で。近づいている。魔魅に追い詰められている。追いつめられていた。しかしそれにしては魔魅が無い。丸きりなつてはいないとすら思つたものだ。秋田の狐は燃え上がる火でおどろかせ、村民どもをして喉を哽らせ闇の中を走り抜けさせた末に自らは姿を見せず逃げおかせたというのに、麻布の狸は薄らぼんやりと姿を露わに出てきて、ただ怪しげに目を光らせて見せるだけではないか。間が抜けている。根性が無い。端からお前が出てきてどうする。全く化かしたことになるのではないではないか。ああ、狐狸衰えたり。今の出羽は知らず、江戸の狸はこの程度の物に成り下がった訳か。残念ながらこちらは北狄の出であるからして、狸の野郎部屋にぬけぬけと入りこんで悪さしようとしても目前にあつて相手になるのは無頓着な田舎者、むざむざと煮られ焼かれて食われるが関の山である。どこまで話したっけ。そうだ。その前の前に板橋の変にくねった路地に住んでいたのだが、そのころ大学生だった私は、柳田國男の一文を読んでいたのだった。するとこう書いてある。秋田県の田代という村はおもしろくて、何しろその村の中心にある名主の娘、長女が代々突如狂つて山に駆け入り、山人の女になるといふ。このような類型はめ

ずらしい、と。田代の中心にある名主は私の家以外にはない。撫然とさせられた。その撫然が怒りになるまで時間はかからなかった。山男の血を引いているとか何とかで陶然となどするものか。私の血統は、民俗学の研究対象だった訳だ。対象とは。というわけで死んだ祖母の聲がして木戸を叩くとか山の中に狩りに出かけると岩の上に女が長い髪を梳くしっていてとか神隠しになった子が帰ってくるとか森に面白いぞーと声がひびくとか真つ赤な異人に女が掠さらわれたとか白鹿なり赤茸なり蛇を食ったり見たりしたら一家全滅したとか或いは口から泡を吹いて黄色い目で狂って山刀で一家を皆殺しにしたとか真つ赤な、とにかく異人は真つ赤で夜なら月の下に出るのだ、真つ赤な鬼のごとき老婆を山刀で斬り殺したらその男から生まれる子供はみな角が生えていたあの猿の子を産んだ河童の子を産んだ毛むくじらの巨人を産んだ娘が居るとか山の神と思しき異形を見た丁度その時父親が家で変死していたことを知るとか白痴の陰部をいじってばかりいる大男が神がかりでこれが年端もいかぬ娘を犯して出来た子がまた真つ赤な鬼女で指差しただけで人が死ぬとか何とか、そんな『遠野物語』に出てきそうな話は売るほどある。うんざりするほど聞かされた。田舎の老人というものは、都会から来た者にうれしがらせにこんな話をするものだ。今なら下手をするとミルチャ・エリアーデの何冊くらいかは読んで話を合わせてくれる。いくらでも実例を見た。私自身も途中からは「都会から来た子」だったからだ。だから民俗学者などというものは頭が悪いと最初から決めてかかって疑わぬい。

同じ大学時代だったように記憶している。まずい学生時代の夏の休暇のとりとめなさは、今となつては一葉の古びた写真のよに「奥州津軽の鰺ヶ沢、新地開いた狐のくどき」と歌われていたのは、資料にある通りだ。なるほど、とは思ふ。その時の彼方にある繁華は片影すらこの目に映したことはない。ただ、往時の殷賑にとどめを刺したのは、私の祖母だ。

私の祖母、ミツは武家の末裔で、はじめて櫛引の血統が他から取った嫁である。晩年は、あまりに母を粗略に扱あつかう兄弟姉妹たちに対して激昂した私の母が引き取り、高校を三ヶ月で中退して手が空いていると見られていた私が介護した。いつも和服を着て白髪を結っているが、脚を悪くしてひとり立つこともままならず、むろん厠に行くこともできず、端然としていることができないのが悔しい、その内心が透けて見える。大抵のことは私がやったが、頑として私に下の世話だけはさせない。七十五は越えていたと思ふ。残念だが、流行りの介護の苦労話は聞かせられない。多少発声せつせいが聞き取りにくいもの意識は明晰であり、よく聞くくどくどしい愚痴皮肉のたぐいや繰り返す昔話やいらだたせる忘却や突如の激昂は、一切なかった。ただ自らの老いをもの静かにかみしめて、目の潤みの底に悲しみを貯めていた。昼飯の世話は私がしたが、歯がないのに新鮮な魚介、特に鮪と烏賊と貝の刺身を好んで、ゆっくりと、ゆっくりと口にくみ、噛みまた噛み、吞んでいる。昼夜の膳で、毎日食べていた。毎日、昼から刺身を食う、食わずにはおれない、このあたりが鰺ヶ沢の、櫛引の女であった。学校をやめてあてがない私は、はじめて交わった年上の女との交情と、介護と津軽の思ひ出話を多く含む祖母との会話、そして読書と音楽のみで日々をくらしていた。そのころは家業も順調で、こうしてうつつけいられたのだった。この祖母が櫛引に嫁入りしたその日に、鰺ヶ沢は炎上し、すべて消失した。中村川に屍体がひと

うになつかしい。だがそれを生きている当人にとつては、なまなかに扱あつかいきれないよるべなさだった。食うための齷齪あくせくも友人たちとの燥はげぎも、どこか焦燥に濡ぬれていて、にがい味をうすらに残していた。それすらもなつかしいと言え、それは年寄りの身勝手と、当時の私は思つたろう。どんなに忙しく立ち働いていても、若い日々のなかに差し込んでくる、奇妙な空白の時間をもてあましている。自然、本を手にするようになる。その夏のあいだの読書の一環として、はじめて手に取つた網野善彦の本に突然鰺ヶ沢が出て来た。田代のこともあつて一瞬うんざりさせられたが、簡にして要を得た淡々たる記述で概略次のようにあつた。津軽の十三湊みなとは天然の良港で、鎌倉時代には北海道のアイヌ、中国、朝鮮、渤海などと交易の重要拠点となつて繁栄した。室町時代に成立した海洋法令集である『廻船式目』には、日本の十大港湾「三津七湊」の一つに数えられている。宏大な日本海貿易の最北の湊、北海貿易の樞要として繁華を誇り、最初期には奥州藤原氏との交易も行つていたらしい。だがこの十三湊は土砂の堆積のために水深が足りなくなつて急速に衰退した。領主の交代などという政治的要因もあつたと聞く。室町時代の中頃の事だ。十五世紀からそれに代わつて台頭、繁栄したのが鰺ヶ沢湊である。同じく日本海に面する宏大な貿易圏の拠点となつた。近世、津軽藩政下でも唯一、海運の拠点が置かれ、藩都弘前から鰺ヶ沢を経て他の湊へと繋ぐ「十三廻り」という河川・海上両方にまたがる航路が開かれた。津軽藩の米は鰺ヶ沢湊に集積されて日本海沿岸を海路西に運ばれたと言ふ。十七世紀には公私合わせて百三十艘の商船が属したそうである。新地という名が今でも残る通り、当時は狐が開いた遊郭も存在して三百年以上残り後々まで栄えた。鰺ヶ沢の盆踊り唄

つ上がった。鰺ヶ沢の男どもに斬られ段られ殺され河に投げ込まれて、顔かたちがもうなかった。ミツの夫となつた祖父源造の「下男」であつた。「弟子」であつた。「弟分」であつた。いろいろないい方で、鰺ヶ沢の女たちは私に教えてくれた。が、みな口を揃えて言うのは、その若い男はミツに「嫉妬」して湊に火をつけてまわつたということである。嫉妬、という言葉だけは、あらゆる鰺ヶ沢の女たち、櫛引の女たちの昔語りに一致している。そしてそれ以上は言葉がないらしく、問うてもこたえがない。祖父の同性愛の相手ということか、と、長じてから問うても、茫まがと何も見えない目をして、何も言わないのだった。みずから生まれ育つた湊を焼き払うほどの動機とは、一体何だったのか。往時の鰺ヶ沢湊は灰になつた。ミツは呪われた女として長く苦しむことになつた。源造はミツの苦しみを慮あはれ婚よめをとりやめにしようとしたが、ミツの実家は出した嫁は出したのだから大事にせよと、今いちど道具をすべて設たてて送おくつてきたと言ふ。ゆつたりと、みどりの油のようにうねる中村川の河港は汐の香りが濃密にこめていて、淡水の鉱物めいたにおいと潮水の塩しほつからいなまぐささにかわるがわる喉と胸を犯せされながら、よく従したがう姉妹たちと石斑魚いしはんを釣つた。三十センチを超える、びきびきと跳ねるかいたからだの、銀にか橙だいだいがさすうつくしい鱗肌をながめていた。鰺ヶ沢ではこの魚を食う習慣がない。臭いからだ。だからその辺の畑に打ち捨てておく。暮れ方、凪いでゆれる川面をみながら、いつも考えるのだった。このどここのあたりに、その若者は浮かんどうか。その屍体は、この道を、凶徒となつて得物を手に怒り狂つて駆けた男たちも、通つたらうか。

私のような裔すえの裔すえにも、心当たりがないではない。津軽の女た

ちは幼少の頃の私に小遣いをやり菓子を食べさせ甘い飲み物を吞ませ氷菓子を食わせ撫でさすっては、喧嘩が強くて口が減らなくて頭が良くて度胸もあつて、女に生まれたら良かったのにと口々に言い合つた。子供のころだから単純によるこんで得意満面、不思議がるということがない。よくよく考ええると妙な文盲だと気づくのは十二になつてからである。その次の年には中学にあがるが、制服を上手く着ることができない。右前の鈕はとめたことがない。つまり左前の、女もののブラウスを着せられていたわけで、髪の毛もロングのストレートだった。この髪の毛を守るためだけに勉強もせずに私立中学の受験を決め、秋田の祖母から百姓の子に学問はいらないと罵声をかけられて、父方とは縁が薄くなつた。お前のような世代の者にそんな言葉をかける者がいるものかとの反問は、さしあたり近視眼者のみのものであろう。あかるい赤と紫と桃色を好んで着させられて、この色の好みだけは今でも残っている。いまは見る影もない坊主頭の大男に成り果てたが、その頃は細くて髪が長く、花車で、世代かかわらず女人にむやみと可愛がられた。あれは同性愛的なものだったのだらうと思う。つい最近、一葉だけ私の中学時代の写真が出てきた。はじめて短く髪を切りそろえた頃だったか。面長で、顎が尖つていて、母はお前整形しなかつたらうねなどと突拍子もないことを言うのだった。丸顔猪首に整形する奴などいるものかと思つた。そして、十七の頃だったか、母親にこう問うたのだつた。櫛引の家は母権制なのではないか、と。母はにべもなく、何だそれは、うちはそんな妙ちくりんなものではない、と津軽弁で言つた。ひとつかみのものを投げるように。いい方を変えて、櫛引は代々女性が当主ではなかつたかと受話器越しに聞いたときには、こともなげに、そうだ

ふくめて、他の女たちは誰もその名前を知らないのだった。源造の母は男しか産めなかつたから、何か祖先の伝説にみずからを重ねるところがあつたのかもしれない、今は思う。そのハルとハナは長いながい津軽の極寒をぬけて咲く春の花のように美しく、強く、あいらしく、賢く、荒々しく育つていった。が、十になるならずで二人とも同時に急死してしまふ。死因は誰にも判らぬ。流行り病だったのかもしれないし、うち殺されたのかもしれない。わからない。すべては歴史の濃くたちこめる霞の彼方にあつて遠い。ただ母はひたすらに悲しみ抜いて、供養のために氏寺たる高沢寺の先祖代々の墓の横に、二人の姿を象つた二体の地藏菩薩の浮き彫りを置いた。これは私自身、幼少の頃から実物を幾たびも見た。そのたびに墓前で母に物語を聞かせられた。今もある。高祖母だかその前だかその前の前であるか判然としないが、母は悲嘆いちじるしく、憔悴はなはだしかった。臥せてばかりはいられないと起き上がつて、大福帳をめくつては指図するも声は嘎れ、上の空で、何も手につかぬ。櫛引とその縁者、女衆男衆うちそろつて大広間に平伏、どうか母上様、温泉にでも行つてお休みなつてはと言上する。そのような暇はない、もう還暦を越えて数年、跡継ぎは見込めない、だから養子の準備も必要だと抗弁する母も情の訴えにはよわく、説き伏せられたか、供回りを数人連れて湯治へ向かつた。どこに向かつたかは伝わっていない。大鰐温泉か、酸ヶ湯温泉か、浅虫温泉は少し遠いか。海の一族のこと、陸路を通つていったとは限らないので、日本海岸沿いを南に下つていった何処かかもしれない。ともあれ、湯治場に到着して骨休めをしようにもものうい。何もかもけうとい。それでひと月ばかりが経つた。いつもの様に朝湯に立ち、湯船に歩み寄ると、

よ、と言つた。そのときは私は二十八になつていた。失踪と行方不明から幾年も経つていた。

元来、櫛引の家は女が家長であつた。当然で、男など当主にしようものなら、種銭で船を建造し商品を積み乗せ、男衆とともに海の彼方へと出港して、そのまま嵐にでも遭えば日本海の藻屑と消えてしまふ。それだけ遠来へと航海していたということであつて、陸に居て男衆女衆のあらゆるれを取り仕切り、大福帳と十露盤を攜んでいる女が宰領するのは自然なことだ。男などは立ち働いて海に出て種だけ残しておればよいのだった。商いが約定通りいかなければ抜刀して海賊となればよい、儲けだけはしつかり持つて来い、死ぬのは男衆で沢山。突如狂うなり殺気立つたりして暴れるなら、中村川に浮かせれば良いだけのこと。男など幾らでも生まれる。女子こそが貴重なのだ。或る者は曾祖母と言う。或る者は高祖母と言う。或る者は五世の祖母と言う。或る者はもつと昔の先祖の母と言う。櫛引の女の語りごとと違つて定まらないが、まず曾祖母ということはなからうと思う。昔、櫛引の母に子が生まれなかつた。男ばかりが生まれる。男をとりかえても女子が生まれぬ。十人か十二人か産んで五十を半ばを過ぎ、あきらめかかつたところに珠玉のような女兒の双子が生まれた。櫛引の一統はおろか、鰐ヶ沢をあげての祝宴となつた。大船一隻ぶんの富が振る舞われたと言ふ。ふたりともに生まれつき背の、くつきり浮いた貝殻骨の右に小判ほどの赤あざがあつて、これも吉兆と一族のものたちはよることだ。二人の名前は伝わっていない。源造の母だけが二人の名前をハルとハナとおぼえていた、と、ミツの祖母様から聞いたが、これは多分捏造とは言わぬまでも伝聞に伝聞を重ねた末の、誰かの付け足しであらう。私の母やその姉妹も

二人の子供がかけてくる。呼び止めてつかまえると、わが亡くなつた娘子たちの生き写しである。ふと振り向かせて、立たせると目の前に小判二つの赤あざが並んだ。そのまま連れ立つて、その少女たちの両親の前で手をつき、千両箱二つを重ねて前に出した。こうしてハルとハナは鰐ヶ沢に帰還し、その後の櫛引家の礎となる。すると曾祖母だか高祖母だかその前だか、家長の母が二人いるということになつてしまふ、というあやしみを、現実にしんじつ存在する地藏の浮き彫りが遮る。後日譚は聞いていなかった。そして、私の祖父源造は、母たちが統べてきた櫛引の家、最初の男の当主である。時はすでに明治、制定された民法に強いられる、曾祖母が指名した。もしやあの中村川に浮いた源造の「下男」は、母の統治を守るためにそうしたのかもしれない。嫁が来て仕舞えば、断たれる何かを守るために、か——それも、遂には突き詰め切れぬことである。おそらくはこのハルとハナから私が受け継いだものがある。視力だ。無論、津軽の女たちの語りに語りの分厚い重なりなまで、その歳月のなかのへだたりのなかで、何よりもわからなくなるのは誰が誰かということだ、この名前すら定かならぬハルとハナのその母がおそろしく目がよくて、湊の誰よりも船団の到着をありありと目にして、一隻足りぬ、沈んだか二隻多い、分捕つたか、などと言つたというのは、あやしいことだ。世代ごと何人かずつ、女男かかわらず立ち働くなか、こうした異能を持つていたと考えるほうが理にはかなう。波濤の果てに目を凝らすのは、家業の一部なのだから。しかし、私が目がいいのは先祖返りだ、櫛引の血だ、ということは一統、信じて疑われない。十四の頃だったか、弟が視力がわるくなつてそのついでに知り合いの眼科医に目を調べてもらったときのことだ。何やら最新

のものだという、双眼鏡を覗き込むようなかたちの、視力検査器では話にならなくて、すつとあれを読めるかいと後ろ側にある本棚の背表紙の、にほんがんかがかいそうかい、うんえいじむきよくだいじゅうなほう、と読み上げた途端、眼科医は優しい諦念を見せているのだった。これは下手をすると視力が三・五以上あるなあ。五とか、もつとかな。いままで学校ではいつも二・〇が楽々見れたろう。うん、でもねえ、これははつきり言うとな、アフリカの太平洋とかに生まれればよかったかもしれないなあ。いまの日本で生きていける目じゃない。ここはアフリカとかモンゴルと違って、何もかもが近い、からね。いつもいつも無理をして近くを見ているんだ。君は。いつかいつの日か——そうだな、二十代の後半かな。急速に老眼がくるかもしれない。ずつとずつと後の話だから、まだまだ怖がることはないけれども、そのときは気をつけて。視力が三・五以上あるということはどういうことか。その老眼科医の言う通り、これは、アフリカの太平洋に住まう人々、あるいはモンゴルの騎馬民族のなかでは普通か、多少目が悪いほうである位だ。彼女ら彼らの視力は三ないし七だとか何かで読んだことがある。つまり、日本のテレビジョンでよく見るアフリカ系のタレントやモンゴル系の力士と同等かそれ以上、二・五きつかりだとすると多く負けたまに勝つ、位のものである。これもその医師が言うとおり、このような手狭な島国に生まれ育ち居着いておいて勝つてどうするという話なのだが。記憶に頼って書く。その本によるとアフリカの諸民族のなかでも極めつきはマサイ族の視力で、実に一二・〇という数値をたたき出した狩獵者もいると聞く。が、どうだろうか。近代化から幾歳を経て都市に定住したマサイ族の人々の平均視力は一・〇程度であり、要する

よく目を凝らせばあれはささくれだろうかと、と首を捻ることができるといふことである。そして、これは今までたった一人、三・〇の視力を持っていて、目が良すぎて本を読むにつらい、僕は蔵書家などはとても言えないが岩波文庫は全部集めたと言っていた、そして妙なことをする人間もいるものだと少年の私を呆れさせた英語の教師にしか信じて貰えなかったことがある。風呂に這入ると当然、揺すれる水面から湯気が立ち上る。水煙のように霧のようにしか見えぬ筈のそのなかに、無数にきらやかしく透明に澄んだ細かなひかりが粒だつて明滅するのだ。水銀の様でも水晶の様でもある何かこの世のものならぬ物質が、重みを完全に失つて空を浮き遊び漂う、その身を細らせる程にも美しいゆくらかな瞬きの身じろぎのありのままが視界を悦ばしく責め苛むのだ、陶然と慄然と茫然とさせるのだ、しかも毎日毎夜。——子どものときから、これを言うと怪訝な顔をされるどころか時には薬物の服用や正気を疑われるので、殆ど言ったことが無い。だがこれは視力さえあれば見えて当然で、水分子が分子のなかでも例外的に巨大な分子であるといふことは、確か中学や高校でも習う事実ではなかったか。だが、「いまの日本で生きていける目じゃない」。良い事ばかりではないのだ。親も含めて周囲の人々よりも三倍以上視力が良い、といふことは、人に見えないものが見えてしまうといふことである。見えないものが一人だけ見えてしまつていふことである。つまり大多数の人々にとつてはこの世ならぬものが、存在しないものが、手前にとつてだけありありと存在するといふことである。訝しまれることを訝しむ。あやしまれることをあやしむ。疑いを疑うことしか出来ず、苛立たせてしまつことに苛立つ以外に手が無い。もし、あなたと連れ立って歩く親し

にこれは遺伝的要素というよりも住まう場所と生活の様式にしたがつて視力が鍛えられたにすぎないそうだ。むろん北海貿易とは言い様で、歴史書を繙けば商い芳しからざる時は一転抜刀して凶行も辞さない服わぬ津軽の一族の影響か、それとも又鬼とも血の交流があつたろう両方の家の影響か。と、遺伝という事ならば、そう考えることが出来たかも知れない。しかし櫛引の女たちは血のせいだ、さあ一体誰に似たのか、誰だ、誰だ、と騒いで血のせいだと言ひて疑うことを知らない。なぜ、この女たちは、私がどうなつてもどんなことをしても誰に似たのか、誰に似たのだと言ひのさう。人を殺しても、女を犯しても、同じことを言うのだろうか。言うのさう、とおさない頃の、髪を結びあげていた私はすしげんなりしながら思つていた。ともあれ、視力がこうも無駄にあるといふことは、一体どういうことか。まず、山手線の車両の一番隅の席に坐つたとしよう。そこから最も遠い中吊り広告の、端から読まれることなど望まれてもいない細かくにすぎない文字で組まれた配布のためか何のためかの符牒めいた記号まで全部楽に読めるといふことである。あなたが入つたことがあるもつとも広いスーパーマーケットを想像せよ。その入り口に立つて特に凝然と見つめるなどといふことをしなくても、いちばん遠い棚に置いてある納豆だの漬物だのが何グラム入つているか添加物は何か、包装に銘記された表示が漏れなく読めるといふことである。これは無論体調にもよるが、元旦の国立競技場のメイנסタンドの山頂に座つて、天皇杯決勝を戦う三浦知良の喉のあたりのかすかに剃り残された鬚が数えられるといふことである。現役時代のドラガン・ストイコヴィッチの、理のないジャッジに苛立つてか手ゆびが白くなるまでに握りしめられた爪がありありと見え、

い人が、ここには無いもの、ある訳も無いもの、自分には一切知覚できないものを知覚し、それに笑い怒り泣き茫然とし不機嫌になる、ことを繰り返されたらどうか。その喜怒哀楽の理由が全く理解できないのに、何故判つて貰えないのが全然判らぬ、といふ怪訝な顔をしている友人や恋人が居たら、どう思うだろうか。

——気色が悪いのだ。そんな男は。確かに物狂いにも見える。が、その理由たるや幻視でも靈感でもなく、単に目がどうしようもなく利くといふことに過ぎないのだからこれは少し助からない。人に見えないものが見えてしまふ子ども、といふことは孤立を余儀なくされる幼年時代を過ごすといふことである。そうなる。自分には見えるものが他人には見えないのだから、黙つていなければならぬのだ、といふ知恵がついていないのだから。しかも目が異常に良いから本当はそう速くもない逃げ足も速いといふことになる訳で、突発的な閉じられた場所における集団的な暴力でなければ回避するのは全く容易い、ばかりか開かれた場所なら有利に立てる。要するに掴み所が無い。薄気味が悪い子どもだったのだ。特殊学級なり特殊学校なりに送るべきか否かと職員会議にかけられていた、といふことはあとで知らされた。ここは津軽ではない。鱈ヶ沢ではない。刀を提げて遠方をうかがわねばならぬ、日本海の船上ではない。相手取る海賊も居ない。まして山人など居はしない。こうして、長じては見神者なり幻視なりと呼ばれもする人々の著作や記録を読んで首をひねることになる。これは私と同じく、単に目が良くて人に見えぬものが見えてしまつただけではないのか。まわりにそう思われて自分でもそう思い込んでしまつただけではないのか。私だつて子供のころ、この右目はハルのもの、左目はハナのもの、空想しかつたことがある。線香

の煙がゆるやかに円をつくり、かおりたてるなか、あの地蔵の浮き彫りを目前に眺めながら。そして、その見えてしまうことを押捺の顔つきをして神秘主義だのなんだのと罵倒していい気になっている者たちへの嫌悪も、そこから止むことがなかった。見える者は見えるのだから、放っておいてやれ。見えないやつは見えないだけなのだから、騒ぐな。白眼視されるのも困るが、高貴な一統の血だなどと言つてめでたがられるのも迷惑だ。祖父源造は目がわるかった。眼鏡姿の写真が大半である。それだけではなくどうにも色が白く、体が弱くて、十代の時に二十歳まで生きられぬと医師に断言され、死ぬまでに三十七回入院し、なにしろ薬が好きで、健康食品が好きで、じゃらじゃらと錠剤を鳴らして粉薬の包をいくつもいくつも食後に飲むのだった。日毎の晩飯が済むと、途端にそわそわはし始める。ミツは万事心得え顔でいちばん良い消鼠の江戸小紋に白の綴織の帯を出してくる。それを着せて、番傘をさしかけて、雪の中に妾だの愛人だのの家にいかせるのだった。私の母はそれをミツの祖母様にむかって詰つた。なぜ自分から着物まで整えて女の家に生かせるのかと。ミツは黙って何も答えない。自分が子供のころあこがれていた髪結い床のそれは美しく気風が良い女亭主がいて、祝い事があるたびに鰯ヶ沢の女たち群れつどつて結ってもらつた、その結い髪はどこに出しても恥ずかしくないもので、立ち居振る舞い万事端然としていて、その姐さんが源造の困い者だと知つたときには青くなつたし、日本舞踊を習いに行つたら事あるごとに源造が見に来て綺麗綺麗と褒めそやすので、いくら子煩悩とは言えよく来てくれるものだとよろこんでいたら、その日本舞踊のすつきりと背が高くうなじが細く立ち姿はこれ以上ない師匠も源造のお手つきで、東京や京都や熱海

憲兵大佐はおかしい、憲兵というのは確か中将が最上位で、弘前師管区に大佐がいるなどということがあるだろうか。あるとしても、鰯ヶ沢までやってくるか。それに、母さんは一九四六年生まれだ。戦争中のその場面のなかに、何故居る。と、母は、ああ、何度なんども親戚中に聞かされたから、自分が見たように思つていた。生まれる前のことを。と言つて、またくもらわしい、遠い、何も見ていないあの津軽の女たちの目をするのだった。しかしこれは女だけに限らなくて、一族の誰からも憲兵の某を一喝して退けたという話は聞いていた。憲兵ではなく軍人だつたとか警官だつたとか県の役所の人間だつたとか、大佐ではなく大尉であつたとか、地下に隠していたのは食料ではなく金塊だつたとか、話の細部は違う。しかし、最後に皆で餅を食つたところまでも、一致している。こう何度も実母から聞かされると、自分もそのなかにいて、ひとつまたひとつと祖父の笑顔を浴びながら餅を食い、餡が舌と口蓋のなかで澄んだあまさと香りを出していたのを、なつかしく思い出しそうになるのだった。そのなかに源四郎の大叔父はいたかと確かめると、いたよと見ていないことを当然のように受け合う。源造は源三として、次が源四郎だ。五人兄弟って聞いたぜ。源一と源二と源五郎はどうなつた。死んだよ。そりゃあ死んだらう。でも、跡継ぎが源造だ。普通源一が継ぐんじゃないのか。それとも、櫛引の家は元来は末の女子が継ぐと聞いた。なら源五郎が継ぐんじゃないのか。どうだろうねえ。とまた茫とひかる目をして言う。空襲があつたでしょう。どこで。青森で。青森空襲か。二機のB29が飛来して青森市内にいまから青森十一都市のなかの半分ほどを爆撃するから避難せよと書いてある六万枚のビラを撒いたが憲兵が回収したその二日後、硫黄島

にもいくらでも女がいて、などと語る母を遮らずにはおれなかつた。それが病弱で二十歳まで生きられない筈で三十七回入院した男がやることか。出来ることか。どこが弱いのか。んだねえ、と素頓狂な声を出す。しかし、源造の葬式の時のみなおそれたものだ、と言う。一体全国から何人の隠し子が出て来るものか。一人、またひとり、近來の女はつきつき喪服でやつてきて、静かに本妻ミツに礼を尽くすと、去っていく。源造のはミツに十人生ませて八人残つたが、他には子は一人もいないのだった。大したものだ、あんたもああじゃなければいけないよと、妙なことを言い出す。源造のような女遊びはいかん、贅沢はいかん、と私が六歳のころからしつこく言う癖に、そのじつ、源造のようになって欲しいのだった。源造に似ている源造に似ていると物心ついたころから言われていた。当惑せずにはいられない。こちらは、その源造に会つたこともないのだ。そういえばねえ、と繰り返して繰り返して語つた話を、また繰り返す。戦争中、憲兵大佐がやつてきて、地下の蔵を開けようとする。物資が隠してあると睨んだらしい。戦争も末期、敗色は濃厚、憲兵も内心そこぐらい怯えをかかえて、何かといきり立って軍刀を抜く。開ける、と割れおめく声で命じる声を聞きながら鼻先一寸の軍刀の切っ先の銀びかりを見つめていた源造は、そのまま眉一つ動かさず、しずかにひとつきり瞬きをする。出てこなかつたらどうする。どうしてくれる。私を誰だと思つている。と、ひくく、かすかな、しかしよく鳴る声で言うのだった。震えだした憲兵大佐を去ねの大音声で退けると、笑つて地下倉庫に赴き大量にひかる米と小豆と砂糖を出させて、餅を作らせて一族にふるまうのだった。膝に乗せられて食べさせられた、と懐かしげにつぶやく母を、やはり息子は遮らざるを得なくて、

から出発した六十二機のB29が鰯ヶ沢上空から青森市内に侵入、八万三千本の新型M74焼夷弾を落とした。が、県当局は疎開した者は配給を止めると脅迫し、憲兵は避難を許さず消火活動を強制し、そのため市街の九割近くが灰燼に帰し千七百人以上の死者を出した。あの時、そうだなあ、うちの母は、みな殺されたつて言つていたなあ。私もミツ祖母様からもそう聞いていた。空襲の時殺された。「殺された」といういい方は英語でもあるまいし、おかしいのではないか、誰が殺したというのか、と反問すると、母は腑に落ちない顔をして黙り込み、また何も見ていない目をすののだった。源四郎大叔父は、どういう人だつたの。さあ。あの人のこと知らないんだよ。はじめから八人だよ。えつ、二人死んでるつて。祖母様そんなこと言つてたの。母権制の家は近代を迎えて父権制を強いられると、男の新当主では一統を御し切らず、一家が分裂して傾いてしまうという話は、よくきく。母たちの骨肉の争いとなる場合もあるとか。しかし源造は自分の代まではよく家を保ちおおせた。奇妙にも女たちの警戒を解く何かがあつたと言う。おのれの代で母の統治がなくなり、家が変わつたという認識があつたのか、源造は息子たちに豊の一字をあてている。長男は豊、はしっこい、愛嬌のある男で、もともと町なり県なりの役人であつたが選挙の参謀をやるために役人を辞め、町長選挙だか知事選だかで数千数万の票を捨てたり書き換えさせるなりして捕まつて豚箱に入れられ、帰つてくると食い扶持がなく、源造は土建屋をやらせることにした。下から二番目、三女の暁子の夫は金木の二番目の金持ちの息子で、広島県の呉で軍事に携わつていたが、その兄を引き抜いて青森県庁の土木課に入庁させた。嫡男の経営する土建屋と娘の夫の兄が勤める土木課のあいだで何が

あったかは、誰でもわかる。その娘の夫の兄は生真面目な男で、つこつと勤めていたが、或る日突然、課内のみずからの机の上に乗って意味のとれぬことをわめきはじめ、そのまま狂った。そのあとその兄がどうなったかは、知らない。妹の夫でなくその兄をそうしたのは、まだ源造の温情だったのかもしれない。が、結局露見したのか、それとも選挙の不正の時と話が混じっているのか、青森県庁の男どもがまっくらなスーツ姿でぞろぞろと鰯ヶ沢までやってきていっせいに源造の足元に額をすりつけた。これは私の母が実地に見ている。つまり県庁の役人どもの悪事も豊に罪をすべて負ってほしいということだった。豊はまた牢に繋がれることになる。源造は即座に一億の金を準備して、無事に豊は戻ってきたと言う。その当時で一億とは、にわかには信じがたい。が、これはほぼ誰もが一致する金額で、保釈金だけではなく賄賂も使ったかと思われた。よくあることだ。次男の豊次はやくざ者との付き合いを拒み、学者肌で、謹厳実直で高校の教師をつとめあげて一生をとりあえずは静穩に終えた。次女の満里子は源造の言うことを頑として聞かぬ。世が世ならば跡継ぎは或いは、と思つたのではないかと空想する。字が定かではないがおそらく久二と書く高名な遊び人として鳴らし、女はいつも十指に余らせて博打打ち、腕のいい大工だったがそれだけにひと仕事すればその稼ぎで幾月も酒を飲み女と乳繰り合つては女を殴るやくざ者が、満里子に手を出した。手を出したとはこちらの言い分、どうやら満里子のほうが惚れたらしい。さすがに事が明るみに出た時、久二は源造の怒りに怯え、逃げ惑つて捕縛され源造に許しを請うて土下座したが満里子のほうが言うことを聞かぬ。何としても聞かぬ。三男の豊彦、通称豊彦は一族の前で満里子をさんざん打ち据えた

にかけては言うなれば「ディーブ津軽」で、僕のような津軽の他の場所の出身者でもついていけないところがあると、聞かせるともなく聞かせられたのは、最近のことだ。つまり十三湊と鰯ヶ沢湊とのあいだ一帯ということか。ここで少し話が判らなくなる。私の母の言うことと私の記憶が食い違ってくる。四男は伸と言う。いすゞ自動車に勤めていまはどうしているか知らない、と。源造の息子は豊、豊次、豊彦で次第名はとぎれているが、突然「伸」とは、どういふことなのだろう。と、母ははじめから八人兄弟姉妹だと思ひ込んでいて、二人死んでいることを知らないのだった。強硬に否定されても困る。私はミツの祖母様から直接聞いているのだから。豊三と豊四がいたのかもしれない。そして、津軽の女たちの何人かから聞いた。みじかい津軽の夏のあいだいつもいつも、取り巻きの三下や亡八とは不似合いなくらいぴりつと清潔な浴衣は白一色、明るいあめ色のみるからに品のいい縞の角帯をしめているのが伊達の伊達たる所以、駅前前の蕎麦屋の緑台で仲間と将棋をうちながら——どの駅前なのかはわからない、鰯ヶ沢かもしれないし、弘前かもしれない——透けるようにしろくて青み見るにつらいような腕に注射針を突き立てて、ゆつくりと、ひやつこく、一筋ふたすじの対流してきては身のうちにひたひたとふれる覚醒剤の味わいを細めていた兇状持ちの男というの、いったいどの男のことなのか。仕込み杖のなかは長脇差とは、誰のことか。ふと、豊彦はおそろし男で、久子は嫁に来るのを怖がった、と呟いた。母のなかでは、謹厳すぎて女の淫蕩をゆるさないという意味になっていた。しかし私は子供のころよく豊彦にかわいがられ、中村川を越えてすぐにある銭湯に連れて行ってもらったものだ。温泉が湧く。そこで桜に牡丹に菊の花、

と言う。私には信じられぬことだ、あの温順で優しい、女には手をあげたこともない顔をして二人の娘の我儘を笑って聞いていた、いつも甘い香りを身からたてていた豊彦叔父が。上の娘もそれなり、下の娘は遊んだ女だったそうで、十五前後の私が自分を嫌っている嫌っていると言い募っていたが、それは要するに自分の父親の豊彦を私に投影していたからというこらしい。遂に満里子は久二と世帯を持つ代わりに一統を追放され、離れた櫛引の家のもつ狭い土地で豚を飼って売りさばき糊口をしのいだ。豚くさくて、豚の糞くさくて、誰も近寄らなくなった、とは私の母の弁である。鰯ヶ沢町役場の資料室で今も見ることが出来る近世の絵地図には、櫛引の家がある辻から中村川を西に越えさらに高沢寺、米町、新町、漁師町の手前に胸肩神社、もとは弁天社だったという鎮守の森の岬を左に折れると例の新地の一帯がひろがるが、そのまた彼方にコジキ小屋というのが描かれている。ブタ屋とも呼ばれていたと聞いている。東北に被差別民がいないなどというのはさすがに考えが足りぬ東京者が言う自堕落な夢想で、おそらくはそこを取り引きしていたか、そのあたりの土地に住んでいたのだろうか。櫛引の家に隣接する「裏」に住んで豚のおいが流れてきて辟易したという話もあって、一定しない。満里子はそこから有ること無いことを櫛引の人々に吹き込み、一族を疑心暗鬼に追い込んで、分裂にいたらせるまでになった。刃傷沙汰もあった。と。ただ、もはや豊の息子たちすら来なくなった櫛引家の墓には、満里子と久二の息子が今でも墓参しに来るといふ。私は会ったことがない。長女の縫子は大人しかつたがいつも満里子の味方をしていて。いま九十歳を越えて新青森駅の近くに住んでいる。その娘の夫は退職して何年か経つ元役人だ。金木のあたりから鰯ヶ沢

龍に獅子に鳳凰、聖観音や千手観音、不動明王の刺青をした男たちと満面の笑顔で挨拶をしあい、ぱちりぱちりと音たててその色とりどりの背を叩くのだった。疵がない牀はない。豊彦本人の背中にも、左の貝殻骨の真下あたりに、刃物でつけたものとも思われない何か謎めいて抉れへこんだ疵があつて、前にも左胸のあたりにと臍上のあたりに、これはあきらかな刃傷沙汰の疵があった。しかし豊彦は依然として温順で、落ち着いた、分け隔てなくやさしい、ねむそうな目をした菓子屋の親父であつて、餡を練りクリームを塗る甘い香りをひつきりなしにその牀からたてていたのだった。いつも飽きるまで菓子を作ってはくれ、作ってはくれた。声をあらげるところすら、みたことがない。親戚に大相撲の横綱がいて、津軽海鼠と呼ばれて相手を手こずらせたが、ねむそうな臉は豊彦そっくりである。その豊彦が、墨入りの男たちと付き合いがあつたということ以前に、舞戸という鰯ヶ沢のなかの地名から四股名を取った名物小兵力士の襦袢を取り替えたことがある母は首をひねって不思議がった。そんな人たちがいたかね。居たよ。漁師町の方へは行ってはいけないと言われていたんじゃないの。そんなことはない、筈、と言う母が、源造をただの菓子屋の親父だと思ひこんでいるのには仰天させられた。どうして菓子屋の親父が一億出せる。どうして菓子屋の親父が息子を土建屋に出来る。という、はじめて気がついた顔をする。津軽の男は演歌歌手になるか相撲取りになるか、あとはやくざになるかだ、という女たちの冗談を一緒に笑っていた母が。

源造は賢沢好みで、銀座で仕立てさせたダブルのスーツを着てピリヤードをした青森でも最初の男で、むろん金を賭けていた。博打は何でもお手の物だった。だがその程度の博打でその生活が

賄えたとは考えがたい。東京と京都と熱海に妾宅があり、そこで芸者だか舞妓だかを大人数ならべて遊ぶのが常だった。東京と熱海の席には幼少の母が縫子とともに呼ばれて、そのたびにひどく閉口したと言う。濟まないと思つたのか何なのか、米軍から仕入れたリーバイスのジーンズを母に与え、喜び勇んで学校に来ていくと何しろ北辺の湊の餓鬼共のこと、見たことも聞いたこともない青味の生地であつて、さんざん馬鹿にされた母はこんなものいらないと源造に向かつて投げつけ、そのときは流石の祖父も心底悲しそうにしていたというが、そのころのリーバイスのジーンズなら俺も欲しいわ、ひと財産だ、と悲しくなつたのは私も同じなのだった。いまなら一本五十万以上はする代物である。そして十代の母はくれと言えぱうれしそうにくれるので週に一度は源造からもらつた一万円を持って弘前に行つてワンピースなり靴なり買ひ漁つたものだとなつかしうに言い、現に母はデザイナーを志して弘前初のデザイン学校に通つたが、それは煙草が一箱百円以下、シングルレコードが三百五十円、封切り映画館入場料二百二十円、大学初任給が一万三千円の時代であつて、あらそうだつたかしらねえなどと笑う母も母である。どうかしている。たしかに、菓子屋は菓子屋なのだ。今は閉店してもうないが、豊彦の代まではあつた。最中が得意で、源造の名が付いた金賞の賞状はこの目で何枚も見つた。源造が戦中日本の菓子屋の組合の理事長で、陸海軍の酒保の菓子や甘酒を引き受けている酒保商人であつて、砂糖も小豆もろくろく奇越さぬのに無理難題を言う「馬鹿な兵隊ども」に腹を立て永田町の帝國議會会館だつたか議員会館だつたかに怒鳴り込んだ、というのは櫛引の一統女も男も皆語るところである。が、どうもおかしい。人口一万にも満たぬほどの鱈ヶ沢の小さな菓子

あとは口をつぐんだ。私が生まれる丁度二年前に死んだ。多くの一統の者どもが死の床を囲んで、ひとりひとり菊の葉で死に水を取つた。豊と豊の嫁の水は吸わなかつた。ミツはひとすじも涙をこぼさなかつた。死の床の写真を、わたしは持つてゐる。病院の寝台で、鬩つた横顔を、いまでもむけてゐる。男が統べる櫛引の家は源造一代で散り散りになり、みるかげもなく衰退していった。一睡もしていなかつたのではないか。薄紅に朝焼けるひかりが、仕事場のしろい壁をあわあわと照らし、部屋になくれば伸ばす影のいくすじかをはしらせていた。たしか神仏に手を合わせるという習慣がない不信心ものの兄弟の、では俺たちはいざというときに何に手を合わせればいいのか、——という長電話の、ほろ酔いの戯れ言が伸びて、のびて、頓狂なようにくねり、では行くか、行つてしまえ、本當に行つてしまふか、と、変にひたひたと冷えた、底意をさぐり合うような声が熱を孕む。こうして突如出立する癖は、ちょうどこの秋の日に、はじまつたのではなくても固まつた。津軽へ、鱈ヶ沢へ、行くのだ。失踪の春から二十年ちかく経つ。というのに、手を合わせるなら母方の墓所しかあるまいという、酔いに任せてだしたことが、この身もろともを攫つていつた。東京駅から新幹線に乗つて新青森まで、新青森から奥羽本線に乗つて弘前行に乗り、川部というちいさな駅でまた乗り換えて五能線でさらに一時間行つたところに、その街はある。朝五時前の始発で出て、昼を過ぎて着く。八時間近くかかる。秋だった。駅に降り立つと、中学生とおぼしい一団がさわぎ、そのあいだを老人たちが縫うようにしている、のが、嘘だつたように散つていき、一人もいなくなる。誰も。プラットフォームからやわらかく差してくる曇ぞらの光が、ひびわれて濡れたコンク

屋の親父が、なぜ都会の名高い菓子舗の当主たちを押しつけて理事長などできるのか、軍部とどのような関係が持てるのか。と、しかし立派なダブルのスーツと何やら勲章めいたものまで下げて宮様の夫妻と映る源造の写真が現存していて、どうも高松宮によく似ているその男は椅子に坐つたままそっぽを向いており、皇族でしかありえぬドレスを来て映るその妻はそんな夫の態度に困りきつた顔をしてつくり笑いを浮かべていて、その写真は厳然として私の部屋にある。右にある引き出し、一番こちら側である。この嫌われようは流石私の祖父であると、縫子と母に皮肉めいたことを言つたことがあるが、さて、往時の殷賑が灰燼に帰した北の果ての港町の小さな菓子屋の親父が、なぜこうして皇族と写真に映つているのか、にわかには説明がつかない。おかしいではないか、何か他に商売をしていたのではないか、何かの相場でもやっていたのではないか。と、突如母はああ、小豆、あずきの話はよくしていた、と言ふのだつた。おそらく菓子を作るのは好きだつたのだろう。蕎麦まで自分で打つていたという。ただ、それは表向きの商売ではなかつたか。あるいは税理対策の。そうでなければ、帳尻が合わぬことが多すぎる。これは母がはつきり見えているし私も子供の頃から聞き知つてゐるが、源造は越路吹雪のパトロンの一人で、楽屋に自由に入入りして酒席も共にしていたと言ふ。源造が何を商いしていたのか、東京や京都や熱海で本當には何をしていたのか、しる術はもう、ない。豪勢な男だつた。それは事実だ。ただ、隠し子も居なかつた代わりに、財産も残さなかつた。自分の商いの一つを豊に、一つを豊彦に分けたのだろう。源造は私の父母の結婚に反対していた。どこの馬の骨か、と、私の父を罵つた。しかし老いが迫つてゐた。豊に任せると一言いつて

リートの床に照り返して、どうかするとまぶしいようになる、のは、何のせい。耳鳴りに似たこの音は。あのかすかに見える駅員の影が、ここからは見えぬ同僚と話してゐるのか、それともラジオが何かに、あいづちでも打つてゐるか。

駅を出る。ひくい建物はともかく、道のつらなる、わかれる、くねる、その姿に、見覚えがある。そうだ、左手に行けば、神といふ書店があつたはずだ。歩き出すとすぐ足が止まる。記憶をさぐつても出てこない場処に郵便局があるのは、まあ、いい。だが、焼けている。これも覚えがない、しろい、何のために建てられたかもわからない建物が、貫通してむこうが見えるほどにやけ穴が空き、無惨に、くろくろと焦げた様を晒してゐる。申し訳程度に張られたロープから垣間見るようにしても、ここ数ヶ月のあいだに燃えたのではないことが知れた。放置されてゐる。

取り壊す予算もないということか。と、歩き出すと、書店がない。待て、ここに旅館があつたはずではないか。この朽ち切つた廃屋が書店だつたか、この枯れ始めた草がなぎ倒されてつみかさなる、空き地が旅館だつたか。ふりむくと、ありありと思ひ出せる。そうだ、この打つ違ひになつた辻の、ごくわずかに道がかさなる交点がしたからふくれあがつたような光景は、あの時のままだ。しかし、居ない。誰も。人っ子ひとり居ない。

海にむかつて歩き出し、懐かしい、従兄弟たちと石斑魚を釣つたあの中村川に出る。河口がちかい。潮のよせるに押されて、流れはのろのろと、ふかぶかとみどりで、川面はかわることなくみどり、ゆつくりと油のようにならぬ。屍体が浮かんだ川のおもてに、いっさんに風がふきよせても、河水はおもく凪いだまま。ミツの祖母様の輿入れの時に往時の鱈ヶ沢湊は燃えた。しかし私

の子供のころは、まだ賑わっていた。人の往来があり、活気があった。だがいまは、抜けてきた駅前通りにすら、半ば廢墟のようになりひとけがない。追憶のなかにあるささやかな繁華は、ない。ぐずつきだしそうな、うすい藍白のいちめんの曇天、の下を低くひくく、さらに濃いはまだ色の雲がちぎれ、もまれて、海の果てへとばされていく。ふっと手を伸ばせばとどいてしまいそうな、すぐそこにある低さなのに、地表には風がない。吹かれる人影も、この一つ身しか、ない。

これでは小説のなかにいるようではないか。幼年時代を過ごした街が、長じてもどつてくれば廢墟だった、だと。亡きふるさと、叶わぬ望郷の思いを、うたえとでも。記憶のほうが捏造だった、とでも。虫酸が走る。判らない、この街は山のほうへと長くながく伸びていることで名高い。スキー場を中心としたリゾートができたとも聞く。街の中心は、そちらに移っているだけなのかもしれない。そうだ――。

気づくと門前にいた。無骨に佇立する背の高い松の麓に、ぞろぞろとちいさな影が居並んでいる。女の両手でつめてしまいいそいな、ちいさな赤子の大きさの顔の、地蔵たちだ。新しくは見えないがなましく紅い、頭巾と前掛けをかけている。惑う歩みが不意にさだまった。この地蔵が尽きるその角を折れて、一番奥が墓だ。いまでも高沢寺に墓はあった。その脇に浮き彫りの地蔵が二つ、ならんでいる。いや、ひとつしかない。ひとつしか。奇妙にまあたらしい。記憶のなかにくつきりと浮かび上がる、墨いろに近いほど黒はんだ、二つのあの浮き彫りではない。途端に何もかもがわからなくなった。この記憶が捏造か、それとも誰かが新しく立て直したか。ここにも、地震があったはずだ。蝸が次々と鱈

いくたびの激昂と悲嘆が、殺意と祝意が、いくつの死と生が、いくすじの血と精液と涙が、この底に貯まっているのか。と、墓をうち眺める感傷は無慙に閉じられた。シャッター商店街、どころではなかった。ベニヤ板が打ち付けられた、すすぼけたおもてうらぶれて、けばだったような庇がつづく。短命、高自殺率、長時間労働、低賃金の北辺の国だ。実家の門は、くぐれなかった。職もなく酒を呑んで明け暮れしている豊の息子が、その奥にいます。はずだった。

ミツの祖母様の死には立ち会えなかった。豊と母の関係がきわめて悪化していたからだとは、あとで聞いた。私は十八になっていた。上京し、予備校に行くと言って両親から金をせしめて、渋谷や新宿や青山や六本木であそびくらす日々が続いた。ふと気がつくとも二十歳の誕生日を迎えていた。それでも酒がやめられなかったが、三ヶ月だけと決めて生まれて初めて勉強というものをした。一日十六時間勉強し、四時間寝て、四時間は生きるために使った。飯を食うと眠くなる。髪を長くしたまま、身長一七八センチで目方が五六キロまで瘦せた。試験会場で目眩におそわれ、思わず膝をついて、試験官の教師をおどろかせた。東京大学文科二類に合格して、また酒を飲んでいると、入学前の三月、父の家業の宝石販売業がやぶれた。私の祐天寺のアパートメントに突然軽トラックで両親と弟がやってきた。破産宣告をするための金も惜しい、と、その百五十万円を私の足元に投げ出すと、そのまま家族は失踪した。百五十万は数ヶ月でなくなった。父は、津軽の人々から数百万円ずつ借金をしてから失踪し、こうして津軽との縁は断られた。食うためなら何でもした。そして貧しい暮らしをしていることは、誰にも話さなかった。食うための稼業で遭ったこと

ヶ沢の海に浮いて――。不意にスマートフォンが鳴り、母に墓がどうなっているのか説明する羽目になる。墓の後ろに林立する、古くまたあたらしい板塔婆に書かれた戒名を読み上げるたびに、母は奇妙に老いた声で、あれも死んだ、あれも死んだのか、と言った。死んだのか。あっちゃア、湯さいがねが、と笑って銭湯によく連れて行って呉れた、あの豊彦も。挿んだか、手を合させたか、と聞く母に、合させたと言った切った。

境内を突っ切って門を出ようとすると、不意にミツの語る声がひびいた。そうだ、カミサマがその男と一緒にするのは止せ、次の男にしろと言ったのだった。津軽は媚巫おんなかまきの国であるそうだが、櫛引の一統には、源造以前からいゆるオシラサマ信仰がない。過去の降霊を事とするイタコも、未来の預言を事とするカミサマも、津軽の地に居着く巫女たちには冷静な中立を守ってきた家である。土着の占卜ウラナヒなど信じていては、外の人びとと商いなど出来るものか。家には断じて入れない。が、婿や嫁が実家の習慣を守ってイタコやカミサマのところにも行って、止めない。しかし結果に従いもしない。ただミツの祖母様は、明治になってはじめて来た嫁だ。実家の風習によって、末の娘をここに連れてきた。あのお堂か。縁日か何だったのか、高沢寺にはイタコやカミサマが集っていたと言う。ただ、落ち着き払った――祖母と母の目にはそう見えた――女将様は、その男はやめる、次に背広を着た立派な男があらわれる、と宣ったのだった。母娘がすすんで言うことが吉事なら蠟燭の火がめらめらと伸び、凶事ならすると小さくなった、そうだ。だが、その託宣がなければ、このひとつ身もありはしないということになる。慥然とさせられた。それが私だ。櫛引の裔の裔だ。

も、誰にも。すこしお人好しで、甘ちゃんで、うかれさわぐのが好きで、大げさな口ぶりでものを言う、馬鹿な奴と思われていたかったし、思われていたと信じる。春の風がふくらむなかでも、夏の日差しにすっぱく叩かれても、秋の枯れ葉あまきにおう大気の下でも、冬の刺して痛い雨に打たれても、土を掘り、土を盛り、アスファルトをくだいて運んで積んで、ものを仕入れて売りさばいた。何を恩に感じてか一握りの大麻の種を渡されたり、からだが売っていきる女に養われるのを拒んでなお押し切られたり、博士課程に進んでも履歴書に高校中退と何度もしるしたり、現場で人の代わりに詫びを入れなくてはならなくなり小物のやくざに土下座すると顔を蹴られて白い鱧革の靴に血の染みをつけてしまひ激昂したそのやくざに何度も殴られて鼻の骨を折ったり、不意に私の状況を知るとなると態度を変え居丈高な大人どもにお前のような身分の奴に学問がやれるものか身の程を知れと言われたり、白くて細身で背が低くて高をくくっていた後輩の男に酔余無理強いにされかかったり、食うために時間がとられてフランス語の勉強もままならずセミネールで罵倒されてその場では戯けてみせて便所であらえきれなくなったり、これは小さいながらも組の後継者と目されているやくざ者の、同性愛的な感情だったのだろう、自分が抱いた女をしきりに抱かせたがって俺と兄弟になるのがいやかと笑っていたのがお前フランスに行きたいかと聞くとき長財布ごと百万円くれてはじめてパリに言って茫然とマレやサンジェルマン・デ・プレのあたりを歩いて買おうとする本の山をひとにらみした瀟洒な書店の主人に笑顔を向けられビエール・ルジャンドルなら知っている、連絡してあげようかと言われて恐縮して逃げました、という話を数年後訥々としたフランス語で本人に語

って笑われたり、飲む打つ買うのうち飲むしかやれず金がすこしでもあまるとすべてレコードにつき込んで選曲をし作曲をしたが周囲を一渡り見渡すと才能の無さを悟って機材ごと全部売り払ったり、案外源造もこのようであつたかもしれないと思うや通帳に残金が一万二千円しかなくてそういえば俺には越路吹雪はいないなど苦笑させられたり、まず東京の街の底の底をうろつきまわる私くらいの若い衆はみな過ぎる通り一遍のことはやつて、どこにでもころがつている悪い男の顔を上げた三十路になつた。すべてよくあることだつた。雨が降っていた。六本木の再開発は遅れにおくられていて、それは土地柄ゆえだつた。どうやら、江戸時代、六本木から麻布の方へ、坂の上から下へと無縁仏を投げ捨てていたらしく、現場から大量の旧びた人骨が掘り出されたのだ。建設業などというものは今でも縁起を担ぐもので、その再開発されたビル群の真ん中あたりに今もある蜘蛛のようなオブジェは、鎮魂の社の代わりだと聞かされた。その人骨を掘って九十リットルのゴミ袋に詰めてトラックに積み込むのは人が嫌がるいい稼ぎで、いつもその作業の光景には、霧雨がしずかに降っている。あか錆が浮いたようないろあいに焼けた髑髏をひとつまたひとつ放り込む。背負つて運ぶ。作業員はみな穢がつて、時には白痴の太つた男と片目の老人と私だけになつた。作業から帰ると、飛び退つて顔を背け、唾を吐くものもいた。その作業もいつか終わる。次に来た夏の日、足場から人が落ちた。垂直に落ちた下には立てかけてあつた鉄板の束があり、目前で右肩から先きれいに切り落とされた。返り血の飛沫が顔や喉や胸をぬらした。なつかしいにおいだつた。呆けていると救急車の鳴く音がして、その男が運ばれていく。足元を見ると、その男の右腕が忘れられていた。おい、お

めて仕舞え、なら博士号はやるう、と、自分の大学でもないのに言い募つた。他の教師や助手が青ざめていた。大学とはこんなものだ。今更のことだつた。すべて終わったあとで、指導教授が赤門の前で、煙草を横ぐわえにして黙つて肩を叩いてくれた。先生は、今でも手紙をくれる。私が先生と呼ぶのは、世界で二人だけである。

*

昏々とした深みからさめかけてそのまま、ながいあいだ浮き沈みする睡りの浅瀬で見たいはずことも知れぬ光景のきれぎれ、そのなかで打ち寄せる潮泡はこの南島のものか、北辺の湊のものかも知れず、ただうつらとしながら開け放した窓のそばで微風になびいてゆれる白紙たちが、あの夕陽のあか橙から夜になる一瞬かけて葡萄いろに雪崩れていくひかりを映してはためいているのを眺めていた。夜はみるみるひろがつたのさう。すべてが月あかりのもとで、茫と青びかる。

真円の月がみつめていて。いぶかしいくらいたつたひとつきり、夜空に浮いてしらく燃えている。ひとすじ、細い銀の寒慄を、ふかぶか刺してくる。この一つ身を痺れさせ、いたづらに掻き立てて、かい無く逸らせて。言葉がつうじない、奥深い森と果てしない海のとよめきが鳴るままに、万象のあやかな喪神は夜の底に沈んでいる。天球はほこらかにひかる玲瓏の球、しろい光波をなみなみ注ぐ。そのさき、海も気圏も大地もひとしなみ、濃墨にぬれぬれている。遙かな過去から知れない未来にわたつて滴り、垂り、ひそひそと数多の森から流れ来るすべてのインクが行き着

おい、待つてくれえ。忘れ物だ。丁度その切り離された手と握手するかたちにひつつかんで走り出すと、むごいくらいにその右腕は重く、おもく、そしてぶよぶよと関節でおれまがり、ぐらつき、つかみづらく、はこびにくく、足元はよたよたとおぼつかなくなつて、滑稽なようになり、あの白痴の男だけがヒイヒイ金気の声で笑うのだった。手が血と脂肪でぬらつた。あてがなかつた。目的もなかつた。そういう時にかぎつて、決まつた男がいるだとか夫がいるだとか、そういう女ばかりが寄ってくるのだった。女はおそろしい、と、呟く自身がどこの濡れた泥のはざまにも転がつている石くれのようで、その石くれにふさわしい凡語だと思つた。何もなかつた。或る一月の末、もう籍を置いてるだけになつた大学から帰る途中、皇居前の祝田橋でタクシーに撥ねられた。腰を折つた。手のひらを折つた。踵を折つた。三ヶ月の入院のあいだ、何度も打ちどころが悪かつたら死んでいたと医者に言われた。頭蓋が割れなかつたのが不思議だと。精神科の前のリハビリ室にいと、統合失調症の子供たちが懐いてきた。イタリヤ製のロバのビニール人形でわらつてあそんだ。腰椎ひとつぶん潰れ、二センチ弱背が低くなつて、これは死ぬまで治らない。右踵だけ膨らんで革靴が履けないようになった。タクシー会社は示談に応じぬ。弁護士など雇えないのでみずから訴状を書いて、裁判官に目を丸くされた。三年は暮らしていける金が残つて、これで終わりにしよう、と、論文を書き始めた。博士号請求論文となつた。博士課程の審査当日には、余程腹に据えかねたか長文のヒステリックな論いのメールを前もつて送つて来た竹沢という国立民族学博物館教授が、寝坊して来なかつた。私にフランス語を仕込んだ、或る学外の教授は三時間も私を理不尽に罵倒した。学者なんてや

く先、その巨大な集積であるかのようにひかる、それは夜の海だ。夜を吸つて夜より昏い。月の光の、うつうつとしげる海原の昏い鏡のおもてに落ちたひとところが、龍魚の肌のようにぎらつき、奇妙にうろこだつて膨らむ。そこから足元まではまばゆく、切れ目なくつながっている。沖つ海から、この寄せては返すさざ波がぬれ砂の傾斜に沿つてきらきらしく平たくみたす、潮泡のしらく真明かな文様がこの両のくるぶしを掻い撫でる、その岸辺に立つ足もとまでを、隈なく縋だつ光芒の道が音もなくこまやかにうねっている。さくさく踏まれる晒れ貝の乾いた潮のにおい、ごぼごぼ鳴る磯の奥から吹き出す藻の熱れるにおい、時折どこからか蒸れてくる、午のあいだにうち捨てられた雑魚の屍の熱れのおい、を運んできてはまた散らす、緩やかにふくらんで背を押す陸風がいくはて、あの陰になる堤防のそのまたその向こうは、もう人の世では無いのかも知れなかつた。ここは北辺の湊か、それとも南の孤島か。不意にまたふくらんだ風が轟と鳴つてふさやかに椰子の大樹をゆらし、その葉の抜き身の一刀ずつを散らす。その風のあまいこと。南洋の甘さだ。紙を押し込んだ果実酒をつける大瓶を、まるで見た目だけはすすけて小ぶりのあいらしい、そのじつ発破をしたたま詰め込んだ罫襦袢を後生大事に抱え込むようにしている自分に気がついて、笑みが泡立つた。何を爆破できるものか。耳にした科白をそのままに写すと、地の文まで津軽ことばになるのには難渋させられた。読めるわけがない。すべて書き直した。これみよがしにしても、晴れがましい場で喝采を受けるような地の言葉では、ない。海に投じて無駄な思えたこともあつたが、もしそうなら、打ち捨てたほうが無駄なのだった。横抱えにしながら泳ぎ出し、切り無くひろがる海の銀鱗のなかに、そつと

押し放した。月の色をしてしばし浮き沈みしていたが、岸边まで泳ぎきって振り返ると、もう海を照らす光芒の道のなか、無数の波がひかかってうねるにまぎれて、もう、どこにあるかわからない。

月が揺れ、海の照る。澄んだ青びかりがまぶしい。この腕に、

この脚に、ゆらめく波にうつろう明暗と、泡が粒立つ影の透かし編みが映り込んで、ややもすると消えぬ刺青のようにきらめいた。すばらしい疾さでかけてゆく、ちぎれもまれていく雲どもが、不意に月にかかって曇る、たびに、地のすべてを昏くする。間なく地はあかるむ。また地はくらむ。その明滅のなかで、もう幾歳もくらしているのかもしれない。海原と天空とを妻合めあわせる灰ひかる線を視ている。風いでいる、筈のくらぐらとした水面がゆつくりと薄らかに線をうねらせている。誰もかもいなくなつた世界だつた。しかしまだ誰もかも居る世界だつた。誰かになることもできなかつたし、誰でもない誰かになることもできなかつた。

ただ、残酷な鎖につながれて、万象は幸福でいるほかないのだつた。しかし幸不幸など感じてはいはいけない。哀れみも自嘲も拒んで、止めることを止めなくてはならなかつた。諦めることを諦めねばならなかつた。遁れることから遁れなくてはならなかつた。人の生き得ぬ絶対的な逃走を夢みるなど、唾棄すべきことだ。私は帰るだろう。帰るのではなく戻るだろう。戻るのではなく行くだろう。また新たにまたなつた土地へ、同じ来た道を正確に辿り直して、寸分違わぬだけ夢想をゆるさないが、しかし未聞の大地を、この脚は踏まなくてはならない。それは使命であつた。それが軛であつた。そして私は来歴を海に投げて、——いままでの私ではなくなつた。顔も失つて。が、それでも依然として私であるだろう。私にはわかつていた。繰り返し遁れ来て、繰り返し戻らねば

ならないことを。報いなく、しかしその報い無さを欲ぶ力があたえられるだろうことを。思い出さない、思い出せない。だが誰かに思い出させてやろう。この怒りと、この闘争とを。そしてこれが他の誰の話でもない、君の話だということ。

朝日は灼け、燃えたつて、昨日となにひとつ変わらない。しかし浜にはひとつ、またひとつと薄羽がながれくる。画然と翼を揃えて、おびただしい赤蜻蛉が飛ぶ。明朝はもう秋だ。身に痛い冷朗の兆しを、私は感じる。